資料解題

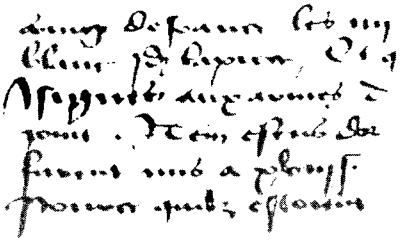
「パリの住人の日記」校注（1）

堀越孝一

ヴァチカン図書館所蔵「スウェーデン女王蔵書1923番写本」を校訂し、日本語に訳し、注釈する。

校注にあたって、1881年に刊行されたアレクサンドル・テュテイの校訂本が批判的検討の対象となる。1929年に刊行されたアンドレ・マリによる刊本と、1990年に出版されたコレット・ボーンによる刊本は、いずれもテュテイの校訂に、なんら批判的検討をくわえず、そのまま依存している本であって、批判的検討の対象とはならない。前者は、Préface et notes d'André Mary と、テュテイの本を借用して、ただ序文をつけ、多少注記を試みるだけですと、それなりに控えめな姿勢を示しているが、後者にいたっては、Texte original et intégral presenté et commenté par Colette Beaune と、なんとも不遜な構えを見せていて、偉大なる実証主義者、大先達のアレクサンドル・テュテイの名を汚している。「オリジナルで完全版のテキスト」とは、なんとねえ、どこを押せばそういえるのですか。批判的検討の対象とはしないと書いておいて、なんですが、注釈文中、あまりのことについつい筆を滑らせてしまう場合があります。ご寛容のほどを。

大先達の校訂にも問題はないとはいえない。印象的な事例を一例だけあげれば、1426年初頭、新暦1427年１月の日付の記事に、通貨に関する触れがあり、et que ceulx qui estoient signés aux armes d'Angleterre とテュテイは校訂した。これに付した注記から、どうやらテュテイはこれをノートルダム参事会記録に読める tres de cugno anglie に対応する言説と読んだらしい。これには、しかし、テキストそのものの読み誤りがある。筆生マシオは signes とは書いていない。asignes と書いていて、テュテイは a の字が読めなかったのではないか。権兵衛がこう書いたのは、同じ注記にテュテイが紹介する1426年11月20日付、１月７日公布の王令に doubles frappes en normandie と読める。どうもそちらの方と関係がありそうだ。



a のカリグラフィーは、かなりのヴァリエーションを見せるが、ここにイラストでお目にかけたようなのは、けっしてめずらしいものではない。だから大先達は、読めなかったのではなく、読まなかったのかもしれない。signes と asignes の違いが、文脈の理解にどう影響する

かは、いずれその段にご案内したい。

日記の記事は写本のフォリオ12表から書き始められている。最初の記事に「400と８年の９月」の日付が見え、フォリオ12裏の最後の記事に「400と11年６月の晦日、火曜日、サンポールの日」の日付が見える。それが続くフォリオ13表は「９月10日」の日付をもつ記事から始まっていて、これは1405年の記事であることが明らかである。同年の記事があとふたつほど続いて、フォリオ13裏の16行目から「1409年、８月の中日」の記事が始まり、その後はおおよそ年代順に記事が続いている。したがって、フォリオ12表裏に書写された1408年、1409年、1411年の日付をもつ記事群は、なんらかの事情によって、別建てに書写されたものと見られる。アレクサンドル・テュテイは、この写本の書写順の乱れに構わず、年代順に整理して校訂した。したがって、テュテイの校訂本は、フォリオ13表の１行目から書き始められた1405年９月10日の記事を初めとして、年代順に、おおよそ item で始まる文章をひとつの記事として編集された。

わたしは、大先達の顰みに倣わず、写本の書写順に編集した。ひとつの記事としてまとまりを持つ文章群の頭に付した数字は、その記事の累積番号を示す。（　）の数字は、テュテイの付した記事番号を示す。

校訂原文は後段にまとめた。記事毎に校訂原文を掲げ、末尾にテュテイの校訂との異同を示す。（　）は校訂原文中の語句である。ただし、テュテイが近代語法に直したところのひとつひとつをあげつらうものではない。写本原文中の語句の読みに関して問題のあるところに限定する。

投稿原稿の枚数制限に配慮して、今回はフォリオ16裏の20行目までを校訂注釈する。

かつてわたしは1964年２月号と３月号の『史学雑誌』に「中世ナチュラリズムの問題」と題する論攷を寄せ、論題に関連させて、渡辺一夫先生の「パリ一市民の日記解題」を批判した。そのあたりのいきさつについては、1990年に論集『中世の精神』を出版するにあたって書き下ろした論攷「『日記』の読みかたについて」にあらかた紹介したので、ここでは繰り返さない。ただ、そこには書かなかったことなので、この機会に書いておきたいが、渡辺先生は、ご自身の「著作集」に問題の解題文を収めるにあたって、わたしへの反論（「弁解」と、先生は慇懃にお書きになっている）を「付記」のかたちで添えられた。「著作集」を出版なさった前後、先生は、ある出版社の社員に向かって（「著作集」を出版した出版社ではありません）、「堀越君がいうようにするんだったら、全部訳せばいいのですよ」と言い放たれたと聞いた。言い掛かりと聞こえた。大先生の嘲りは、若者の心に刺となって留まった。

爾来三十年、刺も丸くなった。「ヴィヨン遺言詩」注釈の仕事がせっせと刺を丸くした。わたしはいまは痛みを感じない。人生試練が、なんとも鈍なおれの心を開いた。いま、老人のわたしは若者のわたしを揶揄する。若き日の若き心は、これはどう見ても、年老いれば老

いゆくものなのだから、許してやれと、おお、なんと真実だ。いま、2002年秋、わたしは先生のご教唆に乗って、日記解題の仕事を始める。

1（4）

なにしろかれらはひどい目にあった。2万6千人以上が死んだのだ。400と8年の9月のことだったが、戦争が続いているあいだに、火で、飢えで、寒さで、剣で、さらに1万4千が死んだのだ。じつに4万だ。

［注釈］ブルグーン侯おそれしらずのジャンのレジュ（リエージュ）攻めの風聞を伝える記事で、1408年9月23日、レジュ近郊オテーの会戦のことが示唆されている。

ヴァチカン写本はこの記事から書きはじめている。それがこれは写本の12葉表で、11葉裏までは、筆生マシオは、このレジュ戦争を題材にとった詩文の書写にうつつをぬかしている。これはマシオが目線の先においているお手本の原本がすでにそうなっていたということなのだろう。してみれば、その詩文の、日記の記事は注であったということか。いいえ、日記の全部がそうだったという皮肉な見方もできるわけで、なんともご苦労様なはなしです。

ところで、ここで権兵衛が計算をしていることに注目。権兵衛は計算の衝動にかられることがよくあるのです。権兵衛？「名無しの権兵衛」の省略で、日記の筆者をこう呼びたい。

2（5）

続く11月の16日、土曜日、前に名をあげた領主たち、ナヴァールだの、ルイだのが、王をトゥーへ連れていった。民衆にはなんのことだかわからず、口々にいいあって、ブルグーン侯がいたらねえ、連中もこんな勝手なことはしなかったろうに。それが連中はしたのだ。王はそこやシャートゥルに17週間もいた。パリの商人頭が何度も何度も出向いたし、町人たちが呼ばれて出かけたりしたが、それが町人たちにとっても民衆にとっても、得になることはなにひとつ決まらなかったのだ。

［注釈］「前に名をあげた領主たち、ナヴァールだの、ルイだのが」

ナヴァール（ナバラ）はナヴァール王シャルル3世を指す。1425年までナヴァール家の当主です。ルイは、まあ、いろいろ考えられるが、アンジュー家の当主ルイ2世ととるのがいちばん穏当だろう。アラゴン王女ヨランドの夫で、一人娘のマリーは1404年の生まれ。やがてヴァレ家の末っ子シャルルの妻になる。一四二〇年代の「王太子シャルル」を支えた閨閥の家系である。

「ブルグーン侯がいたらねえ」

おそれしらずは、リエージュの情勢が安定したのを見定めて、10月の末、パリに向かった。

その知らせに、パリのオルレアン家与党の面々はパニックにおちいった。報復は必至だ。かれらは王家をトゥー（トゥール）に移した。南のレール（ロワール）川の中流です。トゥーレーン（トゥール地方）は王家の直領で、ベーイ（王の代官）が配置されている。オルレアン家与党とブルグーン家との折衝は、パリとトゥーのあいだの町々に会場を設営して続けられ、「17週間」後、シャートゥル（シャルトル）で和合の手打ち式が行われた。権兵衛はこの記事をいつ書いたのだろう？

3（6）

続く3月9日、ブルグーン侯が貴顕を引き連れてもどってきた。同3月の17日、日曜日、連中は王をパリに連れてきた。王は、ここ二百年間、かつて見られたことのなかったほどに敬意をはらわれて迎えられた。夜警隊の隊員、商人組合から出ているの、騎馬の警吏、杖の警吏、また十二人組が、全員、それぞれにちがう定服をつけ、とりわけまた帽子がそうで、ほかの町人たちをまじえて、王を出迎えて進み出る。王を先導するのは12人のトランペット吹きと大勢の楽人。王の向かう先々で、なんとも喜ばしげなノエー！　の叫び声があがり、菫やなにかの花々が王に投げかけられた。夜になって、みんな路上で食事をして、みんなたいそう楽しそうにやっていて、いたるところで火が焚かれて、パリ中いたるところでかなだらいを叩いて騒いだ。翌日、王妃と王太子がやってきた。これを迎えて、前の日なみではない、もっともっとみんな喜んだので、なにしろはじめてパリにきたときからいままで、こんなにも丁重に迎えられて入城したなんて、かつてなかったほどだったのだ。

［注釈］「商人組合から出ているの」ceulx delamarchandise

どうしてこういいまわしたのか。marchandise は、トブラー-ロンマッチ御両所は marcheandise のカタチで立てていて、フォノグラフィーは「マルシェアンディーズ」だよと指示していて、「商業」「商品」の意味合いの用例を列挙した、その最後に、ただひとつ、『エティエン・ブェローの職業の書』から引いて、「商人ギルド」の解を示す。御両所は15世紀にまで探索の手をのばせば、権兵衛のテキストから引いて、その解の用例をふたつに増やすことができたのに。ここは「商人ギルド」でしょう。そうしてその実態はパリの市役所「オテル・ド・ラ・ヴィル」にほかならず、夜警隊はシャトレとオテル・ド・ラ・ヴィルと、このふたつから人員を出して編成したのです。あと、騎馬の警吏だ、杖の警吏だ、十二人組だとシャトレ、すなわちプレヴォ・ドゥ・パリ・ドゥ・ルェ「王のパリ代官」の役所の役人たちについては、どうぞ「ヴィヨン遺言詩注釈」をごらんになってください。別巻に「総索引」を添えてありますから、さがすのはそれほどたいへんではないと思います。

「翌日、王妃と王太子がやってきた」

王妃イザボー・ドゥ・バヴィエールは1370年の生まれ。15歳の春にヴァレ家に嫁す。王妃

としてパリに入城したのは1389年の夏８月。青衣に身をただしたパリ市役所の助役たちの担ぐ輿の上のかの女は最初の子を孕んでいた。この年のうちに生まれて、イザベルと名付けられた。1397年、４人目の子どもを産み、これが男の子で、ルイと名付けられた。権兵衛のいう「王太子」はこのルイです。パルルマンの録事ニクラ・ドゥ・ベイの日誌の1405年８月19日付の記事に、はじめて「ドーファン、ドゥック・ドゥ・グウェン」（王太子、グウェン侯）の名が出ていて、「歳は９歳かそこら」と、まあ、あたらずといえども遠からず。リチャード・ヴォーンの本に、なにやらこの前後に「戴冠式」があったかに読める。ズヴェノー・デズルシン（ジュヴェナル・デ・ジュルサン）の『シャルル６世史』にそのことが書かれているそうで、こんど見てみよう。

４（７）

続く６月の26日に聖父が立てられた。すなわちペール・ドゥ・カンディで、続く７月の８日、月曜日にパリにそのことが知らされた。そのことを祝って、たいへんノールな祭が催されて、前に書いたが、王がトゥーからもどってきた時の祝いのようだった。パリ中の僧院という僧院で、鐘が高らかに打ち鳴らされた。それも一晩中だった。

［注釈］「聖父が立てられた」

ローマ法王に新しいのが立ったということで、「サンペール」聖父は、法王は「パパ」だから「サンパパ」のフランス語で、おかしくはない。「フ・フェ」がおもしろい。「作られた」ということで、そのままの方がおもしろいかな。案外意図的ないいまわしかもしれないのです。次注を参照。「すなわち」もかたいが、「セッタサヴェー」と、これは常套句で、そうとしか訳せない。

「ペール・ドゥ・カンディ」

近代語の読みでは「ピエール」で、「カンディ」はヴェネツィア領のクレタ島北辺の町。ギリシア名ヘラクリオン。そこの出身のペトロスということで、フラーティ・ミノーリ（フランチェスコ修道会）の修道士になった。ミラノ大司教だった晩年、70歳の年、権兵衛があげている日付、1409年６月26日に、当時ピサで開かれていた教会会議において、すでにふたり立っていたローマ法王に対抗する第三の法王に立てられ、法王名簿に「アレクサンデル５世」の名で登録された。だからといって、ピサ側が期待したように、ふたりの法王、ローマのグレゴリウス12世とアヴィノンのベネディクトゥス13世があっさり身を引いたわけではない。前者は1415年まで、後者「月の法王」は1422年まで、しっかり法王座を守っていた。ローマとアヴィノンとピサと、この「三すくみ」の構図は、アレクサンデルが10か月ほどで死去し、あとがまにヨハンネス23世が立てられてからも、しばらくは消えなかった。1414年からはじまったコンスタンツ公会議も、この「教会の裂け目」を埋める、なにか強力なパテ

をもっていたわけではなかった。なんにしても「教会の裂け目」にとりすがって、すこしでも自分の取り分を多くしようとあがくオルレアン侯ルイのような手合いがぞろぞろ出ていて、ルイ・ドルレアンはなにしろ「月の法王」に肩入れしていて、いえ、なに、これはスペイン人で、ペドロ・デ・ルナという名前がそのあだなの由来なのだが、どうぞ『中世の秋』の最初の章をお目通しください、「この月の法王というあだなは、なにか、単純な民衆の心を錯乱させるひびきをもっていたのでなかったか」とホイジンガは書いています。まあ、民衆の目には、ルイ・ドルレアンの妻のミラノのヴィスコンティ家のヴァランティーンが魔法を使う女に見えていたということで、そこにイメージの競合が見られたか。閑話休題。わたしがいうのは、だからブルグーン家はアヴィノンの敵である。ピサに法王が立った。「月の法王」を消せ！　いいえ、「法王が立った」ではなくて、だから「法王が作られた」かな。作った手の一本がブルグーン家の方から伸びてきていたことはたしかである。

「たいへんノールな祭」

「ノール」noble は近代語の発音で「ノーブル」だが、わたしがふしぎに思っているのは、どうしてまた権兵衛はこの祝いを「ノール」といっているのか。「ノール」って、ラテン語の「ノビレス」からきていて、まあ、「高貴な」というような意味合いで使われていたと教わりますねえ。祭が「ノール」である。じゃあ、なんですか、「ノール」ではない祭というのがあるわけですね。テュテイはここのところ、「ピエール・ド・カンディ」に注をつけて、この祝いにもふれ、パルルマンの録事ニクラ・ドゥ・ベイが「この日、とても盛大で楽しい祭が催された、町中火が焚かれ、会食が開かれた」と書いていると紹介している。テュテイは権兵衛のテキストの校訂本を1881年に出版した4年後、1885年に『ニクラ・ド・ベイの日記』の校注を出版した。だから権兵衛のテキストにふれてパルルマンの録事のテキストを引用するときは、アルシーヴの文書から引いている。ここはテュテイは文書番号 X1a 1479, fol.82 と注記している。それが、それがちがうのです。パルルマンの録事の日記の校注本を見ると、この記事、7月11日、木曜日の記事は、ふたつの段落からなっている。

テュテイはていねいに段落ごとに出所のアルシーヴ所蔵の文書簿冊の番号を記していて、前半のは X1a 1479, fol.82r, 後半のは文書番号 X1a 4788, fol.328v です。そうして、権兵衛のテキストの注記に引用したのは、じつは後半の文書からなのです。それに、テュテイは、権兵衛のテキストの注記に、前半のからだと書いていて、文書番号は X1a 1479, fol.82 と書いていて、これもおかしい。どこがおかしいかというと、fol.82「82葉」の、いったい r「表」なのか、v「裏」なのか、指定していない。まあ、そのていどのうっかりミスはだれにでもあることかも知れない。それが文書をとりちがえている。これはどういうことですか。いいえ、ただ、とりちがえただけではない。テュテイがアルシーヴで読んだというのなら、それはそれでもいい。それが、パルルマンの録事のテキストの校注本には、権兵衛のテキストの脚注にテュテイが引用しているテキストは読めない。いいえ、テュテイは、権兵衛のテキストの

脚注に dont cedit jour fut faicte moult grant et joyeuse feste à Paris, par toute la ville, tant en feux que en mengiers publiques (Arch.Nat., X1a 1479, fol.82) と引用している。この文章はパルルマンの録事のテキストの校注本にはないということです。なぜこうなったのか、校訂者は説明していない。いいえ、わたしがいうのは、なにしろテュテイがパルルマンの録事のテキストを引いている。これかな、こういう祭の情景を指して、権兵衛は「たいへんノールな祭」と書いたのかな。そう思った。それが、パルルマンの録事の校注本にあたってみたら、そんなことは書いていない。これはとても疲れることです。テュテイの仕事ぜんたいが疑わしく見えてくる。「ノール」の中身が「焚き火と会食」なのか。いいえ、「焚き火と会食」のある祭を「ノール」と呼ぶのか。そのことを考えてみようにも、考える材料がどこかへいってしまった。はぐらかされた。

「鐘が高らかに打ち鳴らされた。それも一晩中だった」 on sonnoit moult fort et toute nuyt aassi

最後の aassi だが、これは近代語で aussi です。もともとのカタチは alsi だったらしく、これはラテン語の aliud (alid) と sic（フランス語で autre chose と ainsi）の合成で、「他のもののように」を意味する。グレマの古語辞典にはこのカタチで項が立っていて、トブラー-ロンマッチ御両所は aussi と項を立てて、alsi の用例をいくつか拾っている。フォノグラフィーは「アーシ」でしょうねえ。

5 (15a)

注記、400と11年６月の晦日、火曜日、サンポールの日、朝食後の８時ごろ、ヒョウが降り、風強く、雷が鳴り、稲妻が走った。そのすごさときたら、およそだれだって、まだ経験したことのないほどだった。

［注釈］この記事はテュテイによる項分けで15番の記事の最初の段落である。ヴァチカン写本の権兵衛のテキストで第１葉、フォリオ12葉表裏に書かれた最後の記事ということで、それがこれは1411年の日付の記事だから、フォリオ12葉裏表は、1408年、1409年、1411年と、三つの年にわたる記事で編集されていることがわかる。この編集になにかラティオがあるか？　そこが問題で、どうぞ『中世の精神』の「スウェーデン女王蔵書1923番写本の筆者について」をごらんください。

「400と11年６月の晦日、火曜日、サンポールの日」

前書きで紹介したボーン女史あたりは、いとも無造作に「サンピエールとサンポールの祭、６月29日」と注をつける。使徒ペテロと使徒パウロをいっしょに祝う祝日だというのだ。「６月29日」では「ダラン・ジュー・ド・ジューン」６月の晦日にならないことはだんぜん無視する。その日が「火曜日」だったかどうか、たしかめてみようともしない。ボーン女史の

「注」は、ぜんたいこの調子だから、一々めくじら立てていったらキリがない。けれどもこれはひどい。いいえ、ひとつには、わたし自身も、なんの気なしに、「29日のはずなのに、おかしいなあ」と思いはしたが、たしかめないままに過ごしてきた負い目はある。それが、ふと気になって、前後の記事から６月末日は何曜日だったか、割り出してみた。年代順でこれから二つ目の16番の記事に、「土曜日と日曜日のあいだの真夜中ちかく、1411年10月３日」と読める。これでは、あいまいだ。さらに先に進んで、25番の記事に「11月12日、木曜日」というのをみつけた。これからさかのぼって、10月３日は土曜日です。さらに押していって、「６月の晦日」は「火曜日」でした。さてさて、そういうことならば、「６月の晦日」はそれでいい。それが、それに「サンポールの日」がなじむか？　フランスのカトリック教会の信徒が携行する『日用ミサ書』の祝日暦を見ると、６月29日は「聖使徒ペテロとパウロの祝日」で、翌日30日は「コンメモレゾン・ド・サンポール」聖パウロ記念の祝日である。ラテン語で「コンメモラティオ」はミサに組み込まれた諸聖人の記念禱を意味し、また聖人の記念日をいう。聖使徒パウロの記念日が６月30日になったことについては、「聖ペテロの座」であるサンピエトロ大聖堂と、聖パウロの聖堂である「サンパウロ・フオーリ・レ・ムラ」（城壁の外のサンパウロ）聖堂の「献堂記念日」の「トランスラティオ」（移動）がからんで、一筋縄ではいかない経緯がある。ヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』の「使徒聖ペテロ」の記事の末尾に近く、聖ペテロと聖パウロは同じ日に殉教したけれども、６世紀のローマ司教グレゴリウスが、その殉教の日は聖ペテロの祝日にあて、翌日を聖パウロのそれにあてると定めた。そのわけは、その殉教の日がサンピエトロ大聖堂の献堂記念日にあたっていたからであると、どうもよくわからないのだが、なにしろ６月29日のラティオがはっきりしないまま、献堂記念日の暦日まで関連づけながら説明しようとするものだから、「レゲンダ・アウレア」の著者は歯切れが悪い。まあ、それでも『日用ミサ書』の祝日暦を、「大グレゴリウス」を引き合いに出して、保証してくれているわけで、わかりました、「サンポールの日」は「400と11年６月の晦日、火曜日」だったのですね。

６（１）

その後10日から12日ほどして、パリの門の錠前と鍵がとりかえられた。ベリーの殿さんとブルボンの殿さんがパリの町の守備隊長にされた。そうして、なにしろたくさんの軍勢がパリにやってきて、周囲の村々には兵士ひとり残っていないかのようだった。それが（心配したことはないもので）ブルグーン侯の手の者は、かねを払わずにものをとることもなく、毎晩、宿の勘定はきちんとすませ、パリの町なかでは現金で支払いをすませたのだ。この間に、パリの門は四つをのぞいてみんな閉鎖された。四つというのはサンドゥニ、サンタンテーン、サンジャック、それにサントノレで、９月10日には、タンプル門、サンマーティン門、それにモンマートゥル門が漆喰で塗りつぶされた。

［注釈］「その後10日から12日ほどして」

「アプレ」その後といっているのだから、この記事には前がある。「ブルグーン（ブルゴーニュ）侯の手の者は」にも、じつは「デスディ」の文言が入っていて、「前にいった」という意味合いで、なんとも日本語に移しにくく、ねぐってしまったが、「前にいった」のだから、前がある。権兵衛の日記は中途からはじまっている。

「パリの門は四つをのぞいて」

四つあげている門は、その順に北、東、南、西の門です。なにかあまりに理詰めで、おもしろくない。９月10日には、こんどは鍵をかけておくどころか、漆喰で塗り固めてしまおうというので、パリの門は、東の門のサンタンテーン（サンタントワーヌ）から時計の針とは逆回りに、タンプル、サンマーティン（サンマルタン）、サンドゥニ、モンマートゥル（モンマルトル）、そうして西門のサントノレです。おわかりですか。漆喰で塗り固めた三つの門は、セーン右岸地区、「ラ・ヴイル」と呼ばれた地区を区画する「シャルル５世の城壁」の門だった。セーン左岸、「クァルテラティン」（カルチエラタン）をかこう城壁の門は、このときは手つかずにおかれた。おもしろいですねえ、なんにそなえての工事だったか。ブルグーン侯おそれしらずのジャンは８月19日、パリに入った。「その後」といっているのは、おそれしらずの動静と関係がある。

７（２）

続く金曜日、同月12日、レジュ司教がパリにやってきた。パリ代官ほかの面々が、サンドゥニ門の入り口のところで、かれに誓言を立てさせた。かれ自身、また配下の者ども、王に対し、また町に対して背反あるまじく、力を尽くして守護の責務を負うべきことを、かれ自身とかれの主君の名誉にかけて、かれは約束した。そうした後、パリに入り、ラ・トゥリムーイ館に泊まった。同日、かれの到着後、触れがまわって、角燈を往来に置け。水桶を戸口に置けと。そこでみんなそうした。同月９月19日、触れがまわって、地下室に明かりを入れる小窓をふさげと命令が出た。また、続く24日、パリの鍛冶職人、蹄鉄職人に対して、鍋釜職人に対して命令が出て、往時あったがように鎖を作れと。そこで、かれら鉄の職人は、その次の日から仕事をはじめて、祭の日も主の日も休むことなく、夜昼通してはたらいた。また、同月９月26日、パリ中に触れがまわって、資力あるものは、ラボーン・ヴィルのパリを防衛するべく、甲冑をあがなえと。

［注釈］「続く金曜日、同月12日」

権兵衛がたしかにそう書いたのか、マシオなのか、マシオが目線の先に置いていた「原本」にそう書いてあったということなのか、なにしろおもしろい。「同月」は前後のコンテクス

トから「9月」で、また話の中身からおしてもそうで、それが「9月12日」は「金曜日」ではなかった。権兵衛の日記のコンテクストでながめてそうだし、たまたま例のパルルマンの録事ニクラ・ドゥ・ベイの日記に「9月12日、土曜日」の記事がある。「続く金曜日」は「9月11日」でした。いいえ、たしかにそれでいいようで、「レジュ司教」が、8百騎を率いて、サンドゥニ門に立ったのは「9月11日、金曜日」のことだった。

「レジュ司教」

「レジュ」は「リエージュ」の中世のフォノグラフィー。いずれ出てくると思うが、「包囲陣」を意味する「セジュ」が似ているケースで、近代語では「シエージュ」です。マース川中流のレジュは、レジュ司教領の首邑で、それがレジュの町勢力もなかなか強く、この「レジュ司教」も町勢力と衝突して、レジュを出ていた。それにレジュの教会の参事会で司教に選出されながら、僧侶としての身分がかなり低いものだったせいからか、司教叙任を受けていなくて、自分でも「エレクト」と称していた。「被選者」という意味です。レジュを出てからは、ブルグーン家に接近して、そのサポートを受けようと画策していて、こうして「ブルグーン家大事」に「いざ鎌倉」とはせ参じたわけだった。

「ラ・トゥリムーイ館に泊まった」

セーン右岸、ポンヌフの橋のたもとから、北北東の見当で、レアルに突き抜けるブルドンネ通りというのがある。古い通りで、「トゥルシェとオヨーの絵図」にも、その名で、しっかり出ている。その通りに面して「ラ・トゥリムーイ館」があった。14世紀末からこの屋敷をパリの居館とするようになったプェトゥー（ポワトゥー）の領主の家系ラ・トゥレムーイ家の屋敷ということでこう呼ばれる。この一家、プェトゥーの大豪族で、海岸のタルモン領とか、プェテ（ポウチエ）の隣の領主領シャテルローとか、セーヴル・ナンテーズ川のトゥアー（トゥアール）領とか、プェトゥー各所に所領を擁した家系です。14世紀後半から、王家筋の上級役人職につき、その名はそのうち権兵衛のテキストに出てくるが、1372年生まれというジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥレムーイは、はじめブルグーン家、次いで王太子のグウェン（ギュイエンヌ）侯ルイの家政、さらに王太子シャルルの家政、ひいては王太子シャルル変じてヴァレ家フランス王シャルル7世の最上級役人の地位をものにするにいたる。ここでの話は、まだ若年のジョルジュが、ブルグーン侯家に役人として入ったか入らなかったかの頃合いで、屋敷をブルグーン侯に提供したのについては、そういう事情が裏側にあったにちがいない。

「往時あったがように鎖を作れ」

「シェーン」鎖は、権兵衛のテキストに、あと3箇所に出るが、だんだん読んでいくと、なんの「鎖」か、あきらかになる。パリの町の通りの辻々に張りめぐらせて、侵入する敵勢の動きを阻害する仕掛けです。これがパリの町の自治権の象徴物にもなっていて、1382年の騒動以来、自治権が制限され、この象徴物もとりあげられていた。1404年、初代ブルグーン

侯フィリップが死去し、後を継いだおそれしらずのジャンは、1年後、ブルグーン家当主としてパリに初見参したこの機会に、「鎖の特権」をパリの町衆に返却して、その支持をとりつける策に出たということです。なお、「鎖」を権兵衛のテキストのなかで読むことを通じて、渡辺一夫氏の『パリ一市民の日記』の読み方を批判したわたしの論文「『日記』の読み方について」をごらんください。論集『中世の精神』に収めてあります。

「ラボーン・ヴィルのパリ」labonne ville deparis

「ボン」の字にはなやまされる。「ボン」の読みをめぐる思案が「ヴィヨン遺言詩注釈」の通奏低音のひとつの流れを作っている。「ジャーン、ラボーン・ロレーン」を「人のいいロレーヌ女、ジャンヌ」などとごまかしていたむかしのわたしはいまはいない。じっさい、こんなのはどう訳したらいいものか。だから訳さず、カタカナ書きで逃げたのだが、ここでもまた、逃げ出したくなる。それは「ラ・ボーン・ヴィル」は王家の統制に服した町の謂(いい)だという理解はある。それではパリの町はどうなのか。そういう思案を強いられるということです。

8（3）

続く10月10日、土曜日、パリの町が騒がしくなった。なぜだか分からず、見当のつけようもなかった。ただ、うわさではオルレアン侯が全軍を率いてサンタンテーン門にあるということだったが、それはなかった。ブルグーン侯の配下の者たちは武装した。なにしろパリの町衆がしきりに騒いでいて、敵がよってたかって自分たちを破滅させようとはかっていると思いこんだふうだったのだ。どうしてこうなったか、だれにも分からなかった。

［注釈］「10月10日、土曜日」

計算してみてください。前の記事の「金曜日、同月12日」がおかしいとお分かりのはず。

「なぜだか分からず」sans savoir pour quoy

「だれにも分からなかった」sine sceut on

ひきくらべて見ていただきたいのは、savoir と、その変化形の sceut です。後者には -c- の字が入っている。権兵衛のテキスト、というよりも筆生のマシオの書写の savoir と、その変化形は、-c- の字が入っているケースと入っていないケースがある。savoir を scavoir と書くのは新風で、人文主義者のビューティフルな誤解によるものだった。フランス語の savoir「知る」は、ラテン語の scio からきたのに、中世の無知な連中が -c- の字を落としてしまったのだと考えた。だから16世紀から18世紀までのオルトグラフは、たいていのばあい、scavoir です。それが、じつは savoir は、ラテン語の sapio からで、これは sapa「ぶどう酒の新酒」と同類語で、「味わい分ける」が原義です。フランス語の savoir は感覚的知解をいった。なんともすばらしい。ぶどう酒の味が分かるということです。わたしがおもしろいと思

うのは、権兵衛やマシオは、人文主義的新風が吹きはじめた頃合いの知識人です。かれらがどちらを書いたか。「ヴィヨン遺言詩」の詩人、サンブネの司祭や、その作品を写本に書いた筆生たちもです。かれらはどう書いたか。とてもおもしろい。テュテイをはじめ、フランス人文学史家には、このおもしろさが通じないらしい。このことについてなにかいっている人をわたしは知らない。

「オルレアン侯が全軍を率いて」

オルレアン侯ルイ、ヴァレ（ヴァロワ）家当主、フランス王シャルル６世の弟です。先代ブルグーン侯ごうたんなフィリップと張り合っていた。そのフィリップが死んで、しばらく、ルイ・ドルレアンがパリと王家を牛耳っていた。そこに「はやてのごとく」おそれしらずが乗り込んできて、ルイはパリを追い出されてしまった。時局はそんなふうだったのです。

９（８）

1409年、８月の中日、朝の５時と６時のあいだの頃合い、なにしろ雷がすごく、サンラール僧院の屋根の上の聖母の御像に雷が落ちて、丈夫な石造りで、しかも作りたてだったのが、まっぷたつに裂けて、遠くにとばされてしまった。サンラールの町のパリ寄りのはずれで、ふたりの男が雷にあって、ひとりは即死した。それが靴とか、パッチとか、半纏なんかはずたずたに裂けたというのに、身体は傷ひとつ負わなかった。もうひとりは気が狂った。

［注釈］「サンラール僧院」lemoustier de sainct ladre

「トゥルシェとオヨーの絵図」を見ると、サンドゥニ門を出て、サンドゥニへ向かう道筋に、「サンラール（サンラードゥル）」とネーミングされた家屋群が塀でかこわれている。街道に後陣を向けて教会堂もしっかり描かれていて、ああ、この屋根の上の聖母の御像に雷が落ちたのかと、印象深い。もともとハンセン氏病を患う人たちの収容施設だが、この時代はどうなっていたのか、はっきりしない。周囲に家建物も増えてきて、「ラ・ヴィレット・サンラール」と呼ばれる、これは「小さなヴィル」もできていたらしい。「ヴィル」を「町」と訳せば「小さな町」だが、どうも語感が狂う。西に回り込んで、モンマートゥル門を出た見当に「ラ・ヴィル・レヴェック」と呼ばれる一郭があった。こちらはノートルダムの司教の領地で、それははっきりしているのだが、こちらも「司教の町」という訳語がなじむかどうか。ともかくそういう居住集落ができていて、そのパリ寄りの道端で、男たちが雷に打たれたという。

「靴とか、パッチとか、半纏なんかは」ses soulliers et ses chausses son gippon

「セ・ショッス」を「パッチ」だなんて、過激だろうか。職人の股引のようなのをイメージしていただきたい。むしろ「ジーンズ」か。麻地のジーンズ。「靴」と「パッチ」が複数形で書かれていて、「ジポン」が単数形なのにご注目。股引が複数なのはどうか。脚が２本

だということで、複数形で書いたのですよ。「ヴィヨン遺言詩」にも出てきます。「ジポン」gipon は jupon の方がふつうのかたちで、フォノグラフィーは「ズポン」でしょうか。袖のない上衣をいう。「半纏」が近いイメージだ。

10（9）

続く10月、すなわち400と９年、７日、月曜日、ジャン・ドゥ・モンタグなるもの、フランス王家大番頭がサンヴィクトーのそばで捕まって、プチシャトレに留置された。これが捕まった頃合い、パリは騒然とした気配に包まれた。なにやらパリ中、サラセン人でいっぱいだったかのようで、それがなぜ逃げ出したか、だれも知らなかったふうだったのだ。かれを捕まえたのは名をペール・デ・エッサーといい、これはそのときパリ代官だった。以前のように角燈をともし、水桶を家の戸口に置けと命令が出た。夜になると、毎晩のように、これまでパリで見られなかったほどに、なんとも見事な夜警隊が、徒（かち）で行き馬で行った。職人の組合が交替でつとめたのだ。

［注釈］「ジャン・ドゥ・モンタグなるもの、フランス王家大番頭」

「グラン・メートゥル・ドテル・ドゥ・ルェ」、そのまま訳せば「王館のグレート・マスター」だから、執事長というふうに訳してもいいだろう。「大番頭」としたのはわたしのあそびです。財務役人の出世頭で、パルルマンの録事ニクラ・ドゥ・ベイがその正体をあばいている。「背が低く、やせていて、髭は薄く、英明にして機敏、会話に巧みで、機知に富み、鋭敏にして聡く、年齢の頃は五十坂を越えたあたり」、「王とその親族の諸侯から愛顧をうけてといわんか、むしろそのおおまかで天真爛漫なところを利用して、たいへんな権威筋にのしあがり、王と王妃と王太子殿の家政を指図し、王の財政について最高権限をもち、これは王や王太子、また王妃の家政だけのことではなく、王の叔父たちや従兄弟たちの家政についてもまた、かれはたいへんな権限を行使したのであって、とりわけてベリー侯の館で、かれは第一人者で‥‥」

パルルマンの録事の糾弾の筆は、大番頭がふたりの弟を、ひとりはサンス大司教と王家財務方頭取に、ひとりはパリ司教とベリー侯の官房長に据えたこと、その子女を有力な家柄に縁付けた事の次第をねばっこく語る。また大番頭が領地を多数領したこと、とりわけてパリの近郷、「８ないし９リュー」のところのモークーシの城館はすごかった。あまつさえ、「ここ２年ほどのうちに」、城の近くにセレスタン僧院を建てたが、これがまたすごかったと、なんともパルルマンの録事の観察眼は鋭い。

それが後代の歴史学は、パルルマンの録事があるいは知らなかったことを調べ上げて、大番頭の権力の根元に迫る。わたしがいうのはモーリス・レイという方の、シャルル６世の時代の財政についての研究があり、それによると、なにしろ「王の金庫」という、これは王の

私的な支出、あるいは不時の支出に備えるために工夫された特別会計のひとつで、もともとは戦争経費の補いという性格が強かったが、シャルル６世の代に、これが年金の支払い、とくに王家の上級役人に対する年金支払いの財源と化していた。王家親族をはじめ、諸侯は王家の上級役人として、この財源からさまざまな名目での支給を受ける。ブルグーン侯とオルレアン侯は、この領分で競っていたのであって、『ジャンヌ・ダルク』にブルグーン家の事例の細かな数字を紹介しておきました。諸侯の「王権横領」の首根っこを押さえていたのが王家大番頭だった。

大番頭は、なにも特別にオルレアン家に肩入れしていたわけではないが、大番頭がオルレアン家や、その背後霊だった大叔父のベリー侯の家政にふかくかかわっていた事実はあり、先代フィリップの代に甘い汁をたっぷり吸っていたブルグーン家が、当主交替にさいして一時後退した。二代目として登場したおそれしらずのジャンにとって、王家大番頭はなんとも目障りな存在だった。お引き取りねがいたい。「王権横領」のバランスの変化が大番頭の粛正というドラマを演出した。

「サンヴィクトーのそば」

パルルマンの録事は「サンヴィクトー（サンヴィクトール）とパリのあいだで」と書いている。「サンヴィクトー修道院」は現在の「プラス・ジュシュー」ジュシュー広場の南縁に正門を開いていた。「トゥルシェとオヨーの絵図」を見ると、セーン左岸クァルテラティンの東門である「サンヴィクトー門」を出て、「フォーブー・ブールヴァー・サンヴィクトー通り」を行ってすぐのところ、左側に修道院の塀がはじまり、門が見えてくる。そこからセーン河岸にかけて広大な境内を擁していて、だから現在の「パリ大学第６学部とピエール・エ・マリー・キューリー研究所、第７学部」の構内がほぼ往時のサンヴィクトール修道院です。修道院の東寄りに、なにやら風車の立っている高みが見えるが、そこは後代の「ジャルダン・デ・プラント」植物園の一郭です。修道院とパリのあいだで、ということは、「フォーブー・ブールヴァー・サンヴィクトー通り」で捕まったということか。

「プチシャトレに留置された」

シテ島からセーン左岸にわたる由緒ある橋「プチ・ポン」小橋のセーン左岸のたもとに小さな砦があった。もともとパリはシテ島だけだったから、まさにパリの町の砦だったが、セーン左岸に街区が展開して、砦が砦の意味をなさなくなった。パリの南門であるサンジャック門の「バスティ」砦がそれにかわった。14世紀後半、シャルル５世のパリ代官だったウーグ・オーリオ（ユーグ・オーブリオ）が「プチシャトレ」を改築し、地上階は通り抜けの通路とし、１階以上を拘禁所にも使えるスペースにしたのである。

「それがなぜ逃げ出したか」pour quoy ilz senfuioient

テュテイはここを pourquoy ilz s'esmouvoient と書き換えた。書き換えたのはパリの写本の筆生で、それに従ったということで、さすがにうしろめたく感じたのか、ヴァチカン写本の

書写を注記している。ilz を paris ととったわけで、それでもいいかなとは思うのだが、ともかくヴァチカン写本にこう読めて、ilz を sarazins 「サラセン人」と読んで自然なのだから、なにも書き換えることはない。サラセン人でいっぱいのように騒然としたが、それがサラセン人はどこにもいない。どうして逃げてしまったのか、だれも知らなかったと、なんともおもしろい。

11（10）

同月10月17日、木曜日、くだんの大番頭は荷車に乗せられ、役人の服、白と赤のウプランドを着て、同じように白赤の頭巾をかぶり、片方赤、もう一方は白のブーツをはき、黄金の拍車はつけたまま、手を前に縛られ、木の十字架を持たされて、荷車の上に高々と座らされ、トランペット吹きふたりが先に立った。そんな姿でレアルに曳かれ、そこで首斬られた。その後、身体はパリの刑場に運ばれて、ブーツと黄金の拍車はつけたまま、下着姿で高々と吊られた。この噂は、ベリー、ブルボン、アランソン、その他多数、フランスの諸侯にとどいた。

［注釈］「荷車に乗せられ」mis en une charrecte

「シャレット」は「小型のシャール」ということで、車輪の数、馬が曳く、曳かないは定義の要件とはしない。クレスティエン・ドゥ・トゥレ（クレチアン・ド・トロワ）の「リ・シュヴァレ・ドゥ・ラ・シャレット」を「荷車の騎士」と訳すとき、その「荷車」とはどんなのだったか、いったいみなさんはお考えなのだろうか。それは知らないが、ここではどういうのだろう。プチシャトレからレアルまで、橋をふたつ越えて、えんえんと人が荷車を引くのもたいへんだが、「高々と座らされ」hault assis と、これはたぶん伝聞ではない、権兵衛の実見で、荷車の両側板に横板を渡して、そこに座らされている。そんな情景が目に浮かぶ。

「白と赤のウプランド」

以前ここのところを訳したときは、「白と赤に染め分けられた毛皮裏地のコート」とやったが、そのまま訳せば「白と赤のひとつのウプランド」ですよ。かってに「染め分け」るなと、いまのわたしが若者のわたしを叱る。まだら模様と受けとられるかもしれないではないですか。いいえ、正直、コートを染め分けるとき、どうするかは知りませんよ。「同じように白赤の頭巾」といわれても、だから分かったとはいえない。

「ウプランド」だが、これは「スルコ」とくらべられるもので、『パリの家長』と呼ばれている、14世紀も末の、こちらも「名無しの権兵衛」の、あるパリの町衆の一家の主が家族の教育に書いた書き物がある。これの19世紀の中ごろに刊行された刊本に注をつけたジェローム・ピションの教示によると、「スルコ」は薄手のコートで、「ウプランド」は寒くなると着る。上巻の14ページの注に読めますが、1404年ないし５年の４月の日付のパルルマンの記録

で、法廷弁論にそう読めるというのだが、ある会合に遅れてやってきた女性がいた。なんでも結婚式に出るので「スルコ」を着ていって、そのままやってきた。すると、親戚の女性が、もう遅いから、「スルコ」を脱ぎなさいといって、「ウン・ウプランド・エ・トゥン・シャプロン」を与えたという。4月の日付の法廷弁論の記録だからといって、昼間は「スルコ」でもいいけれど、夜は「ウプランド」だよと、このテキストが示唆していると読むのは読み込みが過ぎるというものだろう。「もう遅いから」を、夕方になって空気が冷たくなったからと読むとしよう。「ウプランド」は厚手のコートです。そうして、これは以前なにかで調べたのだが、毛皮裏地がふつうのようでした。ピションの引くテキストは、「ウプランド」と「シャプロン」を対に出している。なぜか、権兵衛のテキストと照応しますねえ。「シャプロン」については、後でお話しします。

「片方赤、もう一方は白のブーツ」une chauce rouge et laut blanche

そのまま訳せば「ひとつの赤いショスと、もうひとつの白いの」です。これは続くungs esperonsといっしょに読んで、はじめておもしろさが分かる。だいたい、ungsなどという不定冠詞がいまありますか。それが中世語にはあった。なにか対になっているものをいうとき、不定冠詞の複数形が登場したのです。このことは「ヴィヨン遺言詩」注釈で、さんざん話題に供したところです。「エスペロン」拍車は対になっている。「ショス」も対だと観念されたということです。脚が2本ある。その1本が赤に、もう1本が白に染められていたということで、さてさて、その「ショス」をわたしは「ブーツ」と戯訳した。戯訳というが、それがまさしく「ブーツ」なのですよ。このことも「ヴィヨン遺言詩」の、こちらは『形見分けの歌』の21節の注釈でお話しした。『遺言の歌』の101節でも話題に供しています。だからここではかんたんにいきます。カミーユ・アンラール女史の『フランス考古学提要衣裳篇』にこう読める。「14世紀末から15世紀、長靴は通常鹿毛色で、毛皮で裏打ちされているのが多く、ショス・スメレといえば、それは男女ともに履く、柔らかでしなやかな長靴の一種であった。」「スメレ」というのは「靴底のついた」の意味合いです。わたしがいうのは、大番頭の「ショス」は「ショス・スメレ」だったのではないか。だからこそ、une chauce rouge et laut blanche ungs esperons dorezと連語になっている。「黄金の拍車をつけた、片側赤、片側白に染められたブーツ」です。

「黄金の拍車をつけたブーツは履いたまま」en chemise atoutes ses chausses et esperons

この意味合いは前注にお話しした通り。それなのに、わざわざこれを注に立てたのは、前非を悔いる意味合いがあるということで、『中世の秋』にホイジンガはこのエピソードを引いている。この訳本は中央公論社の「世界の名著」が初版だが、その初版本に、わたしはこう訳している。「かれは官服に身を正し、礼帽をかぶり、毛皮裏地のコートをはおり、赤白にそめわけた股引をはき、足には黄金の拍車をつけていた。この黄金の拍車をかけ金にして、首をはねられた死体がさらされたのである」。ホイジンガは引用文のかたちではなく、地の

文に紹介しているのだが、いずれにしても「黄金の拍車をかけ金にして」というのはわたしの勇み足で、それもとんでもない見当違いで、なんとねえ、大番頭の首なし死体が、だから頭を下にしてとはいえないわけだが、さかさに吊されている！　その後、訂正する機会をもらったから、いま一般に出回っている中公文庫本ではちゃんと直っている。また、2001年の春に、中央公論新社が刊行した「中公クラシックス」シリーズに、とりわけ訳注を増補して改訂版を収めたが、そこでも、もちろんちゃんと直っている。モノを見ないで文章を書くことのおそろしさを、つくづくと思い知らされたことでした。だから、わたしはモノのありようにこだわっているのです。

「レアルに曳かれ」

「レアル」はいまもそう呼ばれているが、何度かの模様替えを経て、いまではショッピングモールに変貌している。「トゥルシェとオヨーの絵図」を見ると、サンドゥニ大通りを、セーン河岸のシャトレ前広場（「パリの門」と呼ばれたことがある）から北に下っていくと（セーン河岸に向かうのが上りです）、やがてイノッサン墓地の壁が左手の視界をふさぐ。なにしろ高さ３メートルからありましたからねえ。イノッサン教会堂の後陣が大通りに張り出している。イノッサン墓地の西側の一郭、だから大通りから西に入ったところに「レアル」市場があった。市場の広場は、公開の処刑場であり、晒し場であった。

「パリの刑場」le gibet deparis

サンドゥニ大通りをさらに北に行って、サンドゥニ門を出る。レ・フォーブー・サンドゥニ通りをしばらく行ってから右に折れると、「モンフォーコン」と呼ばれた高みに行き当たる。その高みの上に材木で大きな絞首架が組まれている。「鷹の山」という意味で、現在の北駅の駅裏の高みがそこにあたる。

「この噂は、ベリー、ブルボン、アランソン、その他多数、フランスの諸侯にとどいた」

なんとも意味深なエノンセです。前注にあらましお話ししたように、王家大番頭被斬のこのエピソードの背景には諸侯の対立がある。権兵衛がそのことを意識してこう書いたかどうか。それはなんともいえない。このお三方をはじめ、オルレアン党の面々はパリにいなかったわけで、くちさがない町衆の噂にこのお三方の名前が出ていたのだろう。権兵衛は噂の狩人です。オルレアン侯の名前がないって？　２年前に当主ルイを殺害されて、息子のシャルルはまだ15歳。母親のヴァランティーン・ヴィスコンティの袖につかまっている。

12（11）

次の年、400と10年、８月の終わりごろのことだったが、各人それぞれ勝手にパリ周辺に軍勢を連れてきて、そのせいでパリの周囲20リューがほどのところ一帯、荒廃に帰した。なにしろブルグーン侯とその兄弟たちがフランドルとブルグーンの方から軍勢を集めたのだ。もっともこの軍勢は食糧しかとらなかった。ブルグーン侯配下やブルグーン侯に味方する領

主たちの手勢はで、それが食糧は大量にとったのだ。ベリー侯とその味方の領主たちの兵士たちは、強奪し、盗み、教会堂の中で、教会堂の外で、人を殺した。一番ひどかったのはアルマナック伯配下の連中とブルターン勢だった。行き着くところ、パンのたいへんな高値で、1か月後には、上等の小麦粉がセテあたり54から60スーペリジした。町の貧民は、絶望のあまり逃げ出した。その避難民の群れをやつらは襲撃し、大勢殺したのだ。

12（12）

これもみんなやつらの妬み心からで、それというのもなにしろパリの町衆はブルグーン侯を愛すること厚く、パリ代官もで、これは名をペール・デ・エッサーといい、なにしろパリの町をよく守備していて、夜昼の別なく、完全武装し、兵士を多数率いて、パリの町を巡回する。毎夜、パリの町衆に夜警を出させる。それがまたほれぼれするような見事な夜警で、町衆のメンツがかかっている。夜警に出られないものたちには、家の前で見張りをさせる。朝になるまで、通りで盛大に焚き火をさせる。クァルトゥネ、サンクァントゥネ、ディズネが指揮を執った。それが、なにしろベリーの手の者は、サンジャック門を出たすぐのところでパリの住人を捕まえたのだ。ボルデルでもで、サンマルソー、サンミッシェルでもそうだった。だからブドウが摘み取られないままになっていて、種まきもできない。南の門を出て、パリの周囲4リューがところ、サンクリマンの日のころまで、まだブドウの摘み取りをやっている始末。神さまのおかげで、腐ったのはほとんどなかったが、それというのも天気がよかったからで、それが大桶のなかでうまく発酵しなかった。それにパンがパリにこなくなって、町の外に調達に行かなければならなくなった。水路も道路もふさいでいる兵士たちのせいだ。ラ・シャペル・サンドゥニに住まいする、モルレ・ベタンクー殿という名の騎士が、サンブリスまでパンを調達に出かけた。この騎士は、この争乱がつづくあいだ、ほかの町々にも、部下を率いて、そのことで出かけたのだ。争乱は万聖節までつづいた。

［注釈］12（11）と12（12）の2項はまとめて注釈する。分けたのはテュテイの校訂につきあったまでです。

「次の年、400と10年、8月の終わりごろ」dont il advint lannee ens iiij et x environ lafin daoust

この書き出しは尋常ではない。dont は、いまではそうは使わないが、時間の接続詞としても使い、 alors とか、parsuite を意味する。dont…… ens (ensuivant) で「次の年」と訳したが、わたしがいうのは、「次の年」の、それも「8月の終わりごろ」に起こったことを書いている。いったい権兵衛は、どういう日記帳を使っていたのだろう。

「もっともこの軍勢は食糧しかとらなかった。ブルグーン侯配下やブルグーン侯に味方する領主たちの手勢はで、それが食糧は大量にとったのだ」mais ilz ne prenoient que vivres

ceulx auduc de bourg ne ases aidans mais tp largemt en prenoient

この文章の読みはおもしろい。Mais ilz ne prenoient que vivres, ceulx au duc de bourgongne, ne ceulx à ses aidans, mais ilz en prenoient trop largement　権兵衛は、いやむしろ筆生のマシオは、句読点なんか打っていない。だから句読点を打てば、どう読んだかがバレる。テュテイは aidans, mais の読点だけを打っている。vivres, ceulx の読点は打っていない。注記はない。読めたのか、読めなかったのか、分からない。ボーン女史はただテュテイを写しているだけだが、注はけっこうたくさん自分でつけているので、ここは期待したのだが、みあたらない。沈黙の美徳を守ったようだ。おふたりはテキストを読むことにあまりこだわっていない。だんだんと、そう分かってきた。自分が知っていると思っていること、調べて分かったと思ったことを注記する。それが注だと思っている。本文が注を引き出し、注が本文の読みをひらく。そういう作法はかれらのものではない。

「パリの周囲20リューがほどのところ一帯」

「リュー」は４キロ弱、なんと「里」です。パリから80キロというと、西はドゥルー、シャルトル、北はボーヴェ、コンピエーニュ、東はプロヴァン、シャトーティエリーはちょっと遠いかな、南はパリ - オルレアン街道を行って、メレヴィルのあたりです。メレヴィルは、むかし、こわい領主の一族が根を張っていて、12世紀のことですが、そのころまでは街道はそのあたりを通っていた。それが旅人がそこを嫌って、西寄りに、旅人にえらく親切な僧院があった。みんなそっちに流れて、街道が西にずれてしまったといういわくつきの町です。

「一番ひどかったのはアルマナック伯配下の連中とブルターン勢」

『ベリー侯のいとも豪華なる時禱書』の「暦絵」の４月のは、パリ南西50キロほどのとこにあったドゥールダン城を背景に、野に遊ぶ４人の貴人を描いている。と、まあ、そんなふうに紹介されるのだが、じつはこの４人、年長のふたりがアルマナック伯ベルナールとその妻ボーン（ボンヌ）・ドゥ・ベリー、このふたりの娘ボーン・ダルマナックとその許婚者シャルル・ドルレアンが若い方のふたり、そう見て悪かろうはずはない。この年の２月、オルレアン家の若き当主シャルルはベルナール・ダルマナックと和親条約を結んだ。ベルナールの姉妹のベアトリックスがミラノのヴィスコンティ家に嫁いでいたが、夫に先立たれた。寡婦になったベアトリックスがイタリアで所有する権益をオルレアン家が保証するというのが、オルレアン家がアルマナック家にちらつかせた餌だった。なにしろシャルル・ドルレアンの母親ヴァレンティーナはヴィスコンティ家の娘である。なんとも強力な保証だった。オルレアン家は是が非でもアルマナック家の支援をとりつけたかったわけで、アルマナック家はガスクーン（ガスコーニュ）の大領主である。ガロン川（ガロンヌ）とピレネー山脈にはさまれたこの土地の中央部、北はガロン河畔のアジャン、東はアジャンからオークに線を引き、すこし南にのばしてマッスーブという、いまは小さな町のあたりまで。マッスーブはアジャンでガロンに合流する支流ジェール川上流の町だ。オークはその中流で、だから東はジェー

ル川までといってもよい。西はエール・スル・ラドゥールという町まで。ここはその名の通りアドゥール河畔の町で、アドゥールはピレネー山脈中央部から流れ出て、北流し、エールの町のあたりでゆるやかに西に向きを変え、ベオン（バイヨンヌ）でガスクーン湾にそそぐ川です。首邑はオーク。ベルナールはその家系で７番目のベルナール名をとる当主で、その姉妹がミラノのヴィスコンティ家に嫁いでいることからも推し量れるように、縦横家と批評してもよく、レール（ロワール）中流ベリーの大領主ジャンの娘ボーン（ボンヌ）を妻としたのも、その縦横機略の表現だったか。このケースで、王の叔父ベリー侯ジャンの主導をどのていど量るか、たしかに問題だが、そのベルナールの娘で、母親と同名のボーンを、オルレアネの大領主、王の甥のシャルル・ドルレアンと結婚させようと思いついたのは、どうやらジャン・ドゥ・ベリーであったらしく、婚約は４月15日、レール河畔ジァンの会合の折に発表された。４か月後、８月、オーヴェルンのリオンで結婚式が催された。リオンはクレルモン・フェランのすぐ北で、ジャン・ドゥ・ベリーの領地だった。ジァンの会合で「ジァンの連盟」が結成された。ブルグーン家に対抗して、ヴァランティーン・ヴィスコンティとその若い息子を助けようということで、オークの大将が「ガスコンの騎兵隊」を連れてきた。いいえ、これは冗談です。ついつい、エドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』を思い出してしまったものですから。「ガスコンの騎兵隊」を権兵衛は「一番ひどかった」と批評する。

「これもみんなやつらの妬み心からで」

テュテイはこの行以下（フォリオ14裏８行末から）を分けて独立の記事12としている。なぜそうしたのか分からない。item ではじまっているところでもないし、だいたいがマシオのテキストは行変えなんかしていない。だから文章はごくなめらかにわたる。校訂本文中、12（11）と12（12）のふたつの段落に分けたのは、テュテイの項立てをご案内したまでのことです。

「クァルトゥネ、シンクァントゥネ、ディズネ」

リトレが16世紀のテキストから、「カルトゥニエが17人、モンフォーコンの絞首柱が17本」と、なにやら意味ありげなのを引いてくれている。なんとねえ、現在のパリは20区に分かれているではありませんか。たいしてちがいはない。「シンクァゥントゥネ」は、いまの発音では「サンクァントゥニエ」だろうが、いってみれば「五十人長」です。それが50人や50軒にはこだわっていなかったようで、リトレは「クァルトゥネ」の配下に「シンクァントゥネ」がふたりいたと書いているが、これは、さて、いつの時代の話か。「ディズネ」、いいえ、近代の発音で「ディズニエ」は「十人組の世話役」といったところかな。なにしろ解説している本がない。

「ベリーの手の者は、サンジャック門を出たすぐのところで」

わたしが憎しみをこめて、こう訳したのではない。とんでもない。わたしは中立です。ど

うも原文と訳文の関係について、そういう観点からものをいいたがる手合いが多くて困るのだが。権兵衛がそう書いている。まあ、一歩踏み込んで訳せば「ベリーに味方する領主たちの手勢は」ということだろうが。いずれにしても「ベリー」と、ここではいいすてていることにかわりはない。「サンジャック門」はシテ島からプチポンを渡って、そのまま、サンジャック通りを南にのぼっていった出はずれの門で、ジャコビン（ジャコバン）修道院とサンテティエン・デ・グレ教会が両脇をかためている。門を抜けると「パリ-オルレアン街道」だ。パリの南の門ということで、ここから東に回り込んだところに「ボルデル門」またの名「サンマルソー門」が位置する。サントジュヌヴィエーヴ修道院の裏手にあたる。テュテイは、「ボルデル、サンマルソー」と、同じ門なのに重ねていっていると権兵衛を咎め立てているが、まあ、そういうことはよくありまして、本文のなかに注が入っていると思って読めばそれでよい。

この門を出ると「サンマルソー修道院」に向かう。そこでこう名付けられた。この門は、カペー家フランス王フィリップ・オーグスト（威張り屋のフィリップ）が、当時のパリの町を囲む城壁を造らせた。その門のひとつで、なんでもそのところの地所の所有者の名前から、そう命名されたという。つまらない。サンジャック門から逆に西寄りに「サンミッシェル門」があった。この門も威張り屋のフィリップの城壁の門のひとつで、ジャコビン修道院の囲いの裏手の門ということになる。ジバールとかジベール門と呼ばれたが、これも事情はボルデルと同じだったらしい。つまらない。14世紀には「ポルト・ダンフェール」地獄門と呼ばれたらしいが、これは門を出た郊外の道を「ル（リュ）・ダンフェール」と呼んだことからで、そのあたりのことについては、どうぞ『遺言の歌』の注釈をおたずねになってください。

「サンミッシェル門」と呼ばれるようになったのは、ヴァレ家フランス王シャルル６世がこれを改築して、次女ミッシェルの名をこれに与えることを希望したからだと、ジャック・イレーレは書いているが、そのあたりのいきさつは分からない。ミッシェルは1395年の生まれ（イレーレは1394年と書いているが、これは旧暦計算のつもりなのか、ただの勘違いなのか、分からない）で、1409年にブルグーン家の御曹司フィリップに嫁している。いまのところ、この話がたしかかどうかは分からないが、ただ、「サンミッシェル橋」との関連はどうなのか。シャルル５世のパリ代官ウーグ・オーリオの指図で、プチポンの下流に渡された「プチ・ポン・ヌフ」新プチポンは、1408年の大寒波で、氷塊にぶつけられて、流されてしまった。1416年に再度橋が架けられ、これが1424年に「サンミッシェル橋」と名付けられた。これは橋を渡ってシテ島に入ってすぐの左手に、「サンミッシェル法衣堂」があって、それからの命名だとイレーレは説明しているのだが、どうもよく分からない。王女ミッシェルは1422年に死去している。王女の名の記念を願ったという父親のシャルル６世も、同年に死去している。王女の名との関連は薄いようで、さてさて、「ル・ドゥ・ラ・アルプ」という長大な通りがつないでいた「サンミッシェル門」と「サンミッシェル橋」と、ふたつの「サン

ミッシェル」の命名の由来が異なるらしい。なんともおもしろい。

「南の門を出て、パリの周囲4リューがところ」

白状しますが、「南の門を出て」とやったのはわたしの勝手で、ここのところ、そのまま訳せば「上述の諸門の向こう」です。わたしがいうのは権兵衛は、セーン左岸クァルテラティンの門を見ている。「ベリーの手の者」がパリの南の門を出て、なだらかに下る南向きの斜面に展開しているわけで、ブドウの話題が出てきてしかるべきところなのでした。「4リュー」はほぼ15キロで、現在南に向かう郊外電車のベー線で行くと、ダンフェール・ロシュロー（さきほどお話しした「アンフェール」通りの残映です）を過ぎ、シテ・ユニヴェルシテール（このあたりが近代の「オルレアン門」）を過ぎ、途中いくつか通過します、ブーラレーンを過ぎ、パルク・ド・ソーを過ぎ、アントニーを過ぎて、マッシイ・パレゾーに着く。そのあたりまでです。オルリー空港の南縁の見当ですねえ。

「サンクリマンの日のころまで」

紀元1世紀末のローマ司教クレメンスの祭日をいう。11月23日。司教クレメンスは、後代『新約聖書』に組み込まれた「コリント人への最初の手紙」の執筆者であったと考えられている。この聖人の日まで、ブドウ畑に人がいるというのはたしかに異常だ。

「ラ・シャペル・サンドゥニに住まいする」

北駅の駅裏を東西に「ブールヴァール・ド・ラ・シャペル」という大通りが走る。その大通りに、北からマルクス・ドルモワという、どういういわれで名付けられたのか、理解に苦しむ通りが上ってくる。大通りに出るところ、両側のたもとに辻公園があるから、すぐ分かる。その通りに入る。この通りは、往時、サンドゥニ門を出て、北に、サンドゥニへ向かう野の道の、ほぼ道筋に当たる。しばらくその通りを北に下っていくと、ポール・エリュアール広場というのに入る。マルクス・ドルモワ通りは、その広場を通り抜けて、そのまま北に向かうが、ただ、そこで名前が変わって、「リュ・ド・ラ・シャペル」となる。およそ1キロほどのこの道こそ、往時「ラ・シャペル・サンドゥニ」と呼ばれた小集落があった。サンドゥニ修道院の領地で、その村の道でした。

これは余談だが、「ポール・エリュアール広場」というのは、広場とはいっても四つ辻で、1971年にわたしがはじめて購ったパリの街路案内、いわゆる「ルコントのパリ・プラン」には、この名はない。ここ30年のあいだに命名されたらしい。これもまた、「あいつも逝って、三十年」のテーマです。いいえ、どうぞ『遺言の歌』の「兜屋小町恨歌」をごらんください。

「モルレ・ベタンクー殿という名の騎士」

テュテイはこの人物のことがいろいろ史料に出てきて、よほど嬉しかったのだろう、細かな活字で1ページにも及ぼうかというほどの長大な注を書いている。なんでもルノー・ドゥ・ベタンクーというのが本名らしく、モルレは通称だという。身分はブルグーン家の内務役人ということで、この年の夏には、ブルグーン侯からシャートゥルに派遣されているし、ここ

での話題は、シャートゥルから帰ったかれが食糧調達の役向きを帯びて方々へ出かけるというもので、シャートゥルでの用向きははっきりしていないが、その前後、ジァンの盟約を結んだオルレアン党は、プェテ（ポワチエ）に集まって策を練っている。これに対して、パリの王政府は、８月の末に、９月なかばを期限に、「召集令状」を発した。王の家臣は武装して集まれということです。「ジァンの連盟」は、これを無視して、９月上旬、シャートゥルまで兵を進めた。ざっとそういう状況になっていて、騎士ベタンクーはそういうコンテクストで動いていた。ブルグーン家官房がこの時点で動かしていたコマのひとつが騎士ベタンクーだった。食糧危機の迫ったパリの住人の目に、パンを調達に出かける騎士ベタンクーが、なんとたのもしく映じたことか。ブルグーン家は食糧調達人を王政府に提供した。これはブルグーン家の王家に対する貸しになった。騎士ベタンクーも当然の報酬を要求する。1413年の日付のパルルマンの訴訟記録は、「食糧をパリにこさせるべく努めたかれが功績に対して1200エク」を王が騎士ベタンクーに負っていることを確認していると、テュテイはアルシーヴの文書を引いている。

「サンブリスまで」

サンドゥニからサンドゥニ道を北にのばしていって、モンモランシーの森の南縁にかかるあたりにサンブリスの町があった。サンドゥニ門からサンブリスまで、ほぼ４リュー、15キロで、サンドゥニの町がちょうどなかほどになる。現在は国道１号線沿いの小さな町だ。４リューだって？　わたしがふざけているわけではない。わたしはただ数字を確認しただけです。

13（13）

この少し前、マトゥリン僧院の役僧が王を前にして説教したことがあった。とてもボンなお人柄の御仁で、しかるべき助言を受けることのないがままに連中が重ねている残忍な所業のことに話は及び、この王国に裏切り者どもがいるにちがいないと語った。すると、その説教を聞いていた、バー枢機卿という名の僧正が、嘘つき呼ばわりし、薄汚い犬とまで相手を罵った。そのことで、かれは大学や町中の人たちから嫌われたが、そんなことはかれにとってどうでもいいことだった。なにしろかれは各人バンドを着けている者たちとひろく付き合いがあって、かれはその者たちの大使だったのだ。なにしろベリー侯がそのバンドを着けていて、ベリー侯に従う者たち全員がそのバンドを着けていたのだ。そんなふうに連中は徒党を組んでいて、連中がパリの町中の人たちに対して抱いている妬み心から、例の代官が降ろされたのだ。あれほど町の防衛に努めていたというのに。なにしろこの徒党を組んでいる連中のうちには、いや、連中のほとんどが、パリを掠奪してやろうと考えていたのだ。門の向こう側から禍がせまってきて、これはみんな悪巧みに長けたアルミナック伯の仕業だとみんないっていた。じっさいほんとうのことで、やつらを殺すには犬を殺すほどにもあわれみを

感じなかった。だれかが門の外で殺されていると、こいつはアルミナックだといったものだった。なにしろアルミナック伯は残忍で、暴君で、情け知らずという評判だったのだ。寒さと飢えがくだんの徒党の連中をやむなく休戦の取引に応じさせたのだが、もしそんなことがなかったら、やつらはもっともっと悪事を働いたことだったろう。まだまだやりたかったが、しょうがないから仲裁人にまかせたのだ。400と10年の11月6日に約定が成った。連中はみんな、再度命令があるまでということで、くにへ帰った。損害を受けたものは受けたのだ。そうだけれども、フランス王国が、連中の悪事の結果の破壊と損害を回復するには、この先、20年はかかるだろう。事態がどんどんよくなったとしてもだ。

［注釈］この記事も、12（11）と12（12）に続く段落と読むこともできる。問題は「記事」といっているのはなにかで、じつのところ権兵衛がはっきりこれがひとつの記事だよといっているわけではない。法文などでひとつひとつの段落を示す item が頭にあるのをさしあたりひとつの記事といっているのだが、ここのケースのように、item が見えなくても、なにか別建ての記事のように見えるのがある。ところが、じつのところ、権兵衛の文章作法は起承転結を無視するところがある。ひとつの主題から別の主題へと、じつに奇妙なぐあいの懸かり方で、平然と移ってしまうのだ。ある時、興に乗って文章を書き継いでいって、そうなのだ。だから、ひとつの記事というのを、クロノロジカルに捉えるのか、文章構成の点でいうのか、そのあたり、なんともむずかしいことになる。権兵衛の文章作法については、どうぞわたしの論攷「中世ナチュラリズムの問題」をご覧ください。

「マトゥリン僧院の役僧」

『遺言の歌』127節に「だからさ、阿呆のマトラン僧院かけていうんだが、これほどの若者ならば、そうよ、バカじゃあない」と、サンブネの司祭は当代の政商三人をからかっている。サンブネの司祭のオルトグラフは mathelin で、当時のフォノグラフィーは「マトゥリン」だったろう。それはともかく、「マトゥリン」と「バカ」の連接は、この修道院の名の由来の詮索を引き出す。くわしくは『遺言の歌』中巻をごらんください。サンブネの司祭の勤め先で、住まいもあったサンブネ教会の境内から道一本へだてて北側、クルーニー修道会の屋敷とサンジャック通りのあいだを領した修道院です。

「役僧」と訳したのは le ministre で、これはまあ、司祭をいわないでもないが、よくわからない。テュテイはこれが著名な説教師で、神学博士のルノー・ド・ラ・マルシュだと注記しているが、いったい注とはなんだろうか。権兵衛がなんでここで le ministre と、ふだんはあまり使わない言葉づかいをしているのか、そこのところを注記して欲しかった。ホイジンガは『中世の秋』第2章で、この話を権兵衛からの情報ということで紹介しているが、それが een prediker 「説教師」と呼んでいて、わたしの訳も「説教師」ということで、これはおかしいのではないか。テュテイと同じ思いこみに立っている。どうして権兵衛が le ministre

と呼んだのか、そのわけを読もうとしていない。

「バー枢機卿という名の僧正が」

「僧正」は戯訳だが、いいわけがなくはない。なにしろ ung prelat nome lecardinal debar の ung prelat をどう訳すか。これはラテン語の praefero「前に出す」の変化形で、代表、総代の意味合いです。僧侶仲間で上位者をいう。「バー枢機卿」はルイ・ドゥ・バー、ラングルとシャロン・スル・ソーンの司教を務め、枢機卿の職を手に入れた教会人だが、異腹の兄のバー（バール）侯エドゥアーが、1415年のアジンクー（アザンクール）の戦いに死去した後を継いで、バー侯も兼ねる。それが、この時点では、まだバー侯ではないわけで、注記もここまでいいわけだが、ひとつだけお話ししておきたいのは、バー枢機卿は、1419年、アンジュー家から養子をとる。アンジュー侯妃ヨランド・ダラゴンの次男坊ルネである。ヨランド・ダラゴンの母親はバー家の出で、ヨランド・ドゥ・バーという。これがアラゴン王ホアンと結婚して産んだ娘に、自分の名を与えた。バー侯エドゥアー３世、「バー枢機卿」ルイは、ヨランド・ドゥ・バーの兄弟だった。だから、1419年にルネ・ダンジューを養子にとる「バー侯にして枢機卿」ルイは、自分の姪の息子を養子にとることになる。さらに同年ルイ・ドゥ・バーは、ロートリンゲン（ロレーヌ）侯シャルル２世と談合し、ロートリンゲン侯家の跡取り娘イザベラとルネ・ダンジューの婚約をとりきめた。結婚は翌年の秋になるが、これによって、バー侯領はロートリンゲン侯領に統合されることになる。ただし、ロートリンゲン - バーの新しい当主はアンジュー家の一員ということになる。ルネの姉マリーは、ヴァレ家の「王太子」シャルルと結婚する。姻戚関係は複雑だが、なんとかその見通しをつけておかないと、景色が見えてこない。ボーン女史はルネ・ダンジューがルイ・ド・バールの甥だという。ルイがヨランド・ダラゴンの兄弟ですか？　女史をはじめ、フランス人歴史家の目には、ヨランド・ダラゴンを中心とする人脈のネクサスが見えていない。これは、もう、おどろくべきことです。なお、bar を「バール」でなくて「バー」の表記は、ここでは edouard を「エドゥアール」ではなくて「エドゥアー」と同じく、わたしの判断によるものです。ほかにもこの種のはいっぱいある。ただ、ここではボーン女史のケースだが、近現代の人がなにかいっている場合は、近代のフォノグラフィーにしたがって表記する。原則、そんなところです。

「なにしろベリー侯がそのバンドを着けていて、ベリー侯に従う者たち全員がそのバンドを着けていたのだ。そんなふうに連中は徒党を組んでいて」

「バンド」は白地の帯だが、それが肩掛け帯だったかどうかは、ここでは分からない。いずれ後でということで、おもしろいのは「そんなふうに連中は徒党を組んでいて」も、ごらんのように、bande という同じコトバを使っている。もっとも「寒さと飢えがくだんの徒党の連中をやむなく」のところは bende と読める。マシオ氏は、そうそう几帳面ではないのです。閑話休題。そこのところがなんともおもしろい。権兵衛は意図的にそう書いたのだろう

か？　だとしたらすばらしい。諧謔と諷刺の詩人サンブネの司祭にますます顔がダブってくる。

「やつらを殺すには犬を殺すほどにもあわれみを感じなかった」

ここのところ、まようところです。on avoit autant depitie detuer ces gens come dechiens この校注をはじめるについて、これまで部分的に訳をつけてきたのは放っておいて、初心に返って訳しているのだが、はじめわたしはこう訳した。「人を殺すのも犬を殺すのも、やつらにとっては同じだった」 どうも、訳しながら気になって、以前訳したのを見てみたら、ぜんぜんちがった。主客転倒もいいところで、問題は ces gens の読みでしょう。これを、かの徒党の連中が「人を殺す」ととるのは、やはりおかしい。ces gens こそが「かの徒党」でしょう。だとすると、ここに訳したようになる。パリ方も、けっこう、やつらをやっていたということです。あるいは、レトリックでしょうね。

「だれかが門の外で殺されていると、こいつはアルミナックだといったものだった」

だから、これも主客転倒で、ボーン女史などは、「やったのは」という趣意がふくまれていると、なんともうがった解釈をしてみせてくれる。前後のコンテクストで、前注に白状したような誤解をしてしまうと、ここもそういう読みにせざるをえない。それがどうもそうは読めない。門の外に殺されてくたばっているのを見ると、ほら、アルミナックだと、みんなしたり顔をしたということでしょう。

「損害を受けたものは受けたのだ」

この一文、「エ・クィ・ア・ペルドゥ・シ・アペルドゥ」et qui a perdu si aperdu 、なんともすばらしい。ずんと胸に応えるいいまわしだ。テュテイは a ce que on les mandast, et qui a perdu si a perdu ; mais le royaulme と、si a perdu で、セミコロンで切って、「再度命令があるまでということで、くにへ帰った」につなげて読んでいる。わたしがいうのは、そうすると「クィ・ア・ペルドゥ」は「くにへ帰れなかった者」というひっかけで、だからテュテイは、この一文を「死んだものたちは死んだのだった」と読んでいる。この読みには賛成しかねる。si は近代語の ainsi で、こうして、とか、かくして、とか、それほど意味合いは強くない。perdre は、他動詞としてのまま、絶対用法として、補語をとらずに「損害を受ける」というほどの意味合いで使うケースがある。ここがそれで、「損害を受けたものは受けたのだ」、それをいまさらとやかくいってもはじまらない。「そうだけれども」mais とあとにつながる。「失ったものは失ったのだ」と訳すと、もっと胸にずんと応える。

14（14）

このころ、セーンの川幅はとてもせまくなって、降誕祭の前のサントマの日にこんなだなんて、夏のサンジャンの日だって、これ以上水が少なくなったのは見たことがないほどだった。それでも、神さまのおかげで、軍勢が引き揚げてから５週間たった今日このごろ、最上

の小麦がセテあたり18から20スーペリジでパリで買えたのだ。

［注釈］「サントマの日にこんなだなんて、夏のサンジャンの日だって」

サントマの日は12月21日、サンジャンの日は夏祭りの日で、６月24日、なにか理詰めですねえ。夏のセーンの水涸れと冬の増水をくらべている。

「それでも、神さまのおかげで」

「それでも」neantmoins とはなにごとか。セーンの流れが滞って、水運が思うにまかせなくなった。それでも、というふくみか。テュテイは知らん顔。ボーンは、あいもかわらず、注についての思考がはたらかないのか、小麦の値段に注をつけて、「標準価格は20スー・トゥールノワだった。パリジはトゥールノワより安いから、スチエあたりの価格はたいへん低かった」とおろかしいことを書いている。第一に、標準価格なんて存在しなかった。第二に、むしろこれが大問題なのだが、女史はトゥルネ（近代語の読みでトゥールノワ）とペリジ（パリジあるいはパリジス）を逆にしている。女史は付録に「貨幣について」なにやら書いているが、そこで「４ドゥニエ・トゥールノワ＝５ドゥニエ・パリジ」と堂々と書いている。目をおおいたくなる。これは逆です。閑話休題。小麦がどれほど安かったかは、どうぞ他の記事をごらんになって、くらべてみてください。

なお、「セテ」は、筆生のマシオは sex と略しているが、フルネームは sextier です。トブラー‐ロンマッチ御両所は sestier で項を立て、sextier のオルトグラフは、ようやく14世紀なかばの書き物である『パリの家長』から拾っている。どうも中世の秋のオルトグラフだったらしい。古典ラテン語の sextarius からということで、だから sextier の方がタダシイなんてことはない。フォノグラフィーはどうも「セテ」の方がいいようですね。いいえ、わたしはこれまで「ステ」と書いていたのだが。近代語は setier で、たぶん「スチエ」あるいは「スチェ」と発音する。御両所の拾った20ほどの文例のうちにも、setier は、わずか２例だが出現する。そのこともあるし、sestier のオルトグラフに、mestier と脚韻を踏ませているケースが多い。また、loier, braier と脚韻を踏んでいるケースも、１件ずつだが、認められる。わたしがいうのは、フォノグラフィーは「セステ」ではないということです。

古典ラテン語の世界では、sextarius は congius の６分の１で、それはいいのだが、ただ、これは液体の話らしい。六進法は、穀物の方にも生きていて、「セテ」は12分の１「ムー」です。まあ、そのうち「ムー」も出てきますから、その折の話として、ここでは中世の秋のパリの「セテ」は156リットルという数字が、一応、示されていることをご案内しておきます。

15（15b）

続く1400と11年、くだんの徒党は悪行を再開した。８月の終わりごろ、サンドゥニ方面からパリ前面にやってきて、ブルグーン侯に挑戦状を発し、双方、モンディデに兵を集めたの

だ。だが、かの徒党は、ブルグーン侯の軍勢がいかに大軍かを知り、攻撃をしかけることをあえてしなかった。ブルグーン侯は５週間ものあいだ、待機したのだ。ブルグーン侯はこの事態を知ると、かれらが戦争を仕掛けているのは王とボーン・ヴィルのパリに対してだけなのだといい、（かれが召集した）町の兵士たちをくにに帰らせ、かれらを無事に護送した。

［注釈］「８月の終わりごろ、サンドゥニ方面からパリ前面にやってきて」以下の一節だが、これをどう読むか、たいへんややこしい。1411年７月なかば、オルレアン家の官房は、ジャルジョーから王あてに書簡を送り、最近のブルグーン侯の背信をとがめた。さらに、調子に乗って、７月末、ブルグーン侯あてに挑戦状（これを「デフィ」 defi という）を送りつけた。これに対して、８月なかば、ドゥーエにいたおそれしらずのジャンは、オルレアン家の若者の「デフィ」に答える書簡を送った。ジャルジョーはオルレアンからレール（ロワール）川のすぐ上流です。ドゥーエはリールのすぐ南。この時点ではアルテ（アルトワ）の町です。首脳はそれぞれそんな配置だったが、戦局はピカルディーで推移した。いいかえればソンム川の流域で。９月のなかばには、おそれしらずはモンディデ（モンディディエ）に入って参謀本部を設営した。モンディデはアミアンとコンピーン（コンピエーニュ）のほぼ中間点に位置する。オルレアン家の若者は、岳父のアルマナック伯に補佐されて、ボーモン・スル・エーズ（ボーモン・シュール・オワーズ）を出て、モンディデに迫る。ボーモンはポンテーズ（ポントワーズ）に近いエーズ河畔の町です。じっさい、シャルル・ドルレアンの軍勢は、モンディデ近くに布陣したのだが、そこで「西部戦線異状なし」。10月はじめ、アルマナックは陣を引き払って、南に向けて行動を起こし、サンドゥニを包囲する。おそれしらずは10月なかば、ポンテーズから、パリの南にまわりこんで、パリに入った。以上の経過が権兵衛の日記に凝集されている。なかなかどうして、パリの町衆の御時世を見る目つきはしっかりしている。

「町の兵士たちをくにに帰らせ、かれらを無事に護送した」

ブルグーン家はフランドルの町々と「ミリティア」の契約を結んでいる。「民兵」と訳そうか。武装自弁で町が領主に提供する「助力」のひとつである。権兵衛は「コムーン」と呼んでいる。「コムーン」は町衆の団体そのもので、軍事力に限定した使い方は、ふつうはない。テュテイは、この一節の読みで、かなり混乱している。異本照合にも紹介したように、deparis les renvoia と見えるところを de Paris, lors renvoya と読み替えている。いいえ、マシオが書いたとおりで読めるといっているのではない。たぶん les はまちがいだろう。目線の先に置いた原本に、つづいて et les convoya と見えるので、うっかりしたのかもしれない。convoya がおもしろい。テュテイはマシオが renvoya と書いていると非難がましいが、そうは書いていない。ちゃんと convoya と書いている。しかもここは、この変化形で -i- ではなく、 -y- と書いている。ここはテュテイのうっかりだろう。

あげあしとりはしたくないのだが、もうひとつ、これはとんでもない話で、信じていただけそうもないのだけれど、最後の2語 grant pais ですねえ、テュテイはこれを grant païs と書いている（iの頭に点がふたつ載っている）。これだと近代語の grand pays になってしまう。ボーン女史は、なにしろテュテイの刊本しか見ていないのだから、ムリもない、あっさり grand pays と書いている。女史は綴りは全部、近代語に置き換えているのです。これはとんでもないまちがいで、pais は、近代語の paix と pays の両方の意味をもっていた。フォノグラフィーも同じだったと思う。トブラー・ロンマッチ御両所は、paix の方は「ペ」で、pays の意味の方は「パイ」だか「ペイ」だったと示唆しているが、わたしはそれはマユツバだと思っている。閑話休題。フォノグラフィーがどうあれ、権兵衛が書いたのは、近代語で paix の方です。「平和」の方で、「地方」の方ではない。「平和」の方の pais は女性名詞、「地方」の方は男性名詞の違いがある。女性名詞なのだから、形容詞の grant はおかしいではないかとお思いかもしれないが、中世語では granz がもとのかたちで、これは男性形主格単数です。女性形主格単数、それに被制格という格形があって、これの男性形、女性形、いずれにしても単数は grant です。grant pais でいいということで、それにここは名詞を副詞に使っているケースです。

ラルースから出ているグレマの古語辞典がすてきな用例を拾ってくれている。13世紀の詩人ウーダンクのラウールの『メロージ・ド・ポールレグゥェ』というルーマン・クルテ（宮廷騎士道物語）の、1897年にハッレで出版された刊本からということで、avoi fet lidoine biau sire tenez vous pes 「あらあら、とリデーンはいった、あなた、静かにしていなさい」。pais を pes と書いて、発音まで教えてくれる。おわかりですか。grant pais は「平穏無事に」「なにごともなく」という意味です。だいいち、grand pays で、どう意味をとるのですか。テュテイは沈黙の美徳を守っているが、ボーン女史の方は、気が咎めたか、convoya のところに注をつけて（だいたいがそんなところにつけるのがおかしいのだが）「道の大部分、かれらについていった」と書き捨てている。なんとねえ、さぞかしうしろめたい思いがしたことでしょうねえ。

16（16）

そうしてよこしまなアルミナ党の連中はほしいままに悪事をはじめた。収穫の季節の盛りにパリのすぐ近くにまでやってきて、土曜日と日曜日のあいだの真夜中の頃合い、400と11年10月3日のことだったが、パンティン、サントゥエン、ラ・シャペル・サンドゥニ、モンマートゥル、リナンクーといった、そちらの側のパリの周辺の村々に出没し、サンドゥニを包囲した。そうしてサラセン人の仕業かと見まがうまでの悪事の限りをつくしたのだ。なにしろ人々を、あるいは親指で吊るし、あるいは逆さに吊るす。殺し、身代金をかけ、女たちを犯し、放火する。だれがやったかはかまわず、レザルミノーがやったとみんないっていた。

村々に残ったのはやつらだけだった。そうこうするうちに、ペール・デ・エッサーがパリにやってきて、以前のように代官になった。大いにはたらいて、パリ中に触れをまわし、レザルミナは埒外に置かれた、やつらを殺すことができるものは殺し、財産を奪え、と。そこで大勢が出かけていって、くりかえしかれらにダメージを与えた。なかでもはりきったのがブリガンと呼ばれていた村の連中で、仲間が集まり、レザルミナを殺すといいたてて、大いに悪さをはたらいたのだ。

［注釈］「アルミナ党の連中」

いいえ、べつに「アルミナ党」とテクニカルに呼んでいるわけではないが、「レ・フォー・バンド・ザルミナ」と書いているので、「バンド」の意味を汲んだまでです。それよりおもしろいのは、権兵衛あるいはマシオは、13項の記事では armignac と書いているのを、ここでは armignaz と書いている。-c が -z にかわっただけだといっても、このオルトグラフのちがいはおもしろく、どっちにしても「アルミナ」なのか？　あとの方ではまた別のオルトグラフが出てくる。

「パンティン、サントゥエン、ラ・シャペル・サンドゥニ、モンマートゥル、リナンクー」

パリの北東の郊外の村々です。「パンティン」は、いまは「パンタン」と読むが、メトロ５号線の終点近く、自動車専用道の周縁道路（ブールヴァール・ペリフェリック）のすぐ外側の町になっている。「サントゥエン」は、周縁道路を西にいって、すぐのポルト・ド・クリニャンクール（クリニャンクール門）のすぐ外側の町です。メトロでは13号線の終点近くに、サントゥエンの名を含む駅名の駅がいくつかある。もちろんメトロ４号線で終点のポルト・ド・クリニャンクールで降りて、かの有名な「のみの市」を抜けて歩いていってもすぐです。最後の「リナンクー」が「クリニャンクール」です。だからその村は、「のみの市」の見当にあたっていたことになる。あとのふたつは、いまはパリ市内に入っている。「ラ・シャペル・サンドゥニ」についてはもうお話しした。「モンマートゥル（モンマルトル）」については、いずれ話題にする機会がある。

aglinecourt を「リナンクーに」の読みだが、テュテイはここに注記せず、索引に Quartier de Clignancourt と、これは現在の「クリニャンクール」の地名をあげている。じつは大変面倒な話だのだが、テュテイは「パリ」の通りの名とか、街区とか、教会堂とか、なにしろパリのそれは全部まとめて「パリ」の大項目を作り、Abbaye から始まってRue に終わる分類小項目を立てていて、その Quartier の項にその名を挙げていて、これは問題の glinencourt を指しているのです。

だから、テュテイは注記で説明することなく、これは Clignancourt と読むと決めつけている。それが glinencourt がどうして clignancourt と読めるのか。これは難問ですよ。これは固有名詞だから、トブラー・ロンマッチ御両所の辞典には出ない。だからこの語のオルトグラ

フとフォノグラフィーの相関を、この語について測ることはできない。なにか参考になる語形はないものかと探したら、ありました、「牛蒡（ごぼう）」を意味する gleton のヴァリエーションに cleton がある。「小鐘」の意味の clochete は glochete とも書く。だからといって、「牛蒡」は「グルトン」とも「クルトン」ともいっていたとか、「小さな鐘」は「クロシェット」とか、「グロシェット」とか呼ばれていたのですよと、したり顔をして説明するのはやめましょう。「牛蒡」は「ルトン」、「小鐘」は「ロシェット」と耳に聞こえたということなのですよ。

問題は「閉鎖音」なるものです。むかしは「破裂音」と呼んでいたのが、いまは「閉鎖音」ということで「言語学用語辞典」の項目に立つ。ラルースの「言語学用語辞典」の日本語版で問題の項目を見ると、「声道の閉鎖をその本質的調音として持つ子音をいう。閉鎖子音特有の噪音は、空気の流れが急激に開始されること、あるいは急激に阻止されることによって生じる」と、大変分かりやすい。「閉鎖子音特有の噪音」なるものは、およそ音声と表記を拒絶する。喉の奥で破裂した k 音は、c とも書ける。g とも書ける。むしろ音はない。c と書くか、g と書くか、筆生のマシオには確信がなかったのですよ。それともマシオは助手が元本を読み上げるのを耳で聞いて書写した。おまえさんの喉音は、なんだねえ、じつになんともみごとに爆ぜるねえと、マシオは助手をからかう。

「親指で吊るし」

コンテクストで、ここは「手の親指」でしょうねえ。「あるいは足で吊るす」と書いているのだから。

「レザルミナは埒外に置かれた」

「アバンドネ」という動詞を使っている。これは「法の外に置かれた」を意味する。体制外的存在になったということですねえ。レザルミナとレブルグゥイノンと、たがいに相手方を埒外に置く争いが、これからしばらく続く。

17（17）

このころ、パリの住人はペルスの色合いのラシャ地の頭巾をかぶり、サンタンドゥル十字の徽章をつけた。十字の真ん中にユリ花の楯型紋が入っていて、2週間もたたないうちに、パリでは、大人、子ども、じつに10万もの人が、胸や背中にその徽章をつけていた。なにしろつけていなければ、パリから外に出られなかったのだ。

［注釈］「ペルスの色合いのラシャ地の頭巾」

「ペルス」は青とも緑ともつかぬ色合いだが、「ペルスの眼の女神」というと伎芸天ミネルヴァをいう。リトレはラテン語の persicum が語源だというが、これだと「桃」のことで、桃がそういう色合いだというのは解せない。むしろ persicus「ペルシアの」の方が納得がいく。よくわからない。「ラシャ地の」とあるくらいで、ここでイメージされているのはフランド

ルの毛織物である。「ペルスの色合い」のそれについていえば、イープルとかヘントのペルス物が知られていたし、東隣のブラバントのブルッセルの「アズールがかったペルス」とか、マリーンの「ペルスのまだら物」が、ファッションの市場パリに入っていたことはたしかで、さて、つぎに「頭巾」だが、これは「シャプロン」をそう訳していいものかどうか。「帽子」の方がいいのではないか。まあ、どうぞ、わたしのエッセイ「遊ぶ中世」をごらんいただきたいわけで、挿画入りで解説しています。エッセイ集『遊ぶ文化』に収めてあります。1410年代の前半に流行った「シャプロン」は「角頭巾」と呼ばれるもので、顔面は被わない。だからそのかぎりでは「帽子」なのだが、開けばアメーバー型の一枚の布地になる。だから「頭巾」です。頭の上にたごまった布地を、左右どちらか、前後どちららかに「角状に」尖らせるのが粋な被り方とされていた。だから「角頭巾」です。

「サンタンドゥル十字の徽章」

lacroix standrieu と書いていて、書き直せば la croix saint andrieu だが、テュテイの項番号で514の記事では(なぜテュテイの項番号をいうかといえば、校注の仕事のこの段階では、とうていそんな先の記事の項番号までは確定できないからです。テュテイさんのお仕事のを拝借することにする)、standrieu を sainct andry と尋常に書いている。尋常に、と書いたが、近代語のフォノグラフィーでは andre で、「アンドレ」だが、権兵衛、というか、筆生マシオは知らん顔。standrieu と書いたり、sainct andry と書いたり、きままなものだ。「サンタンドゥル」と書いたり、「サンタンドリ」と書いたり、わたしは応対に忙しい。ヤコブス・デ・ウォラギネは、その「聖者伝」の筆頭に「使徒聖アンドゥレアース」をかかげ、「アンドゥレアース」andreas は「男」を意味する andros から出たと、名前の由来から書き始めている。これはなんとも眉唾物で、それはたしかにギリシア語に、andros 「男」とか、 andreia 「勇気」とか、andreios「男らしい」とか見えるが、だからなんですか。「聖者伝」の著者は、なにかアンドゥレアース聖人の「男らしさ」を強調して、「裁きのキリスト」の広報人の役どころをこれに期待したかのようなのだ。 伝記の最後のところ、ある畑地の権利をめぐって町の長と司教とが対立している。司教は「主が主の敵に復讐され、教会に教会のものをとりもどしてくださるよう」アンドゥレアース聖人に祈願した。町の長は罰を受けて、急死した。いやな話ですねえ。

ヤコブスの語源論は、まあ、置いておくとして、権兵衛とその同時代人の用語集のなかで「アンドゥレアース」はどう書かれていたか。それを探索するには、and - rieu, and - ry と、ふたつに分けて考えてみるのがよいようだ。というのは、andreas の語を探しても辞書には見あたらず、それが rieu も ry も、トブラー - ロンマッチ御両所が riu で項を立てている、「小川」を意味する語のヴァリアントなのです。そこに andreas なる固有名詞のオルトグラフの変容のさまがうかがえる。

御両所はヴァリアントに rieu, rui, ruit, roit, ru, rut, ri, rif をかかげ、さらに rus, ris, rius,

ruz のオルトグラフの見える用例文を拾っている。同じテキストのなかで ru と riu のふたつのオルトグラフがあらわれることなど、御両所の拾い集めた文例集をつぶさに点検して、いまのところわたしが理解したのは、riu のフォノグラフィーは ru と ri にグループ分けができそうだ。あるテキストでは ruz と pleu を脚韻を踏ませていて、riu 系列は「ル」と発音する。それが le duc rollant ala boir a un ri / et le paiens le refist autresi「リ・ドゥ・ルーラン・アーラ・ブェー・ラ・ウン・リ / エ・ル・ペーアン・ル・ルフィ・オートゥルシ」は ri とautresi に脚韻を踏ませている。ri を「リ」と読むことは明らかだが、ただ、用例は少ない。紹介した文例は「王のジェスト」系列の「シャンソン・ド・ジェスト（武勲詩）」だから、これは、まあ、古手の文例だといってもよいが、それが権兵衛も、後の方で ry と書いてみせている。御両所、15世紀のテキストはほとんど見ていない。だからひとつ探しそこねたわけで、残念でした。権兵衛の日記にまで迫っていれば、ry の用例をひとつ、獲物に加えることができたのに。

さてさて、そこでその「サンタンドゥル十字」だが、これは斜めに交差している十字架の写しだと伝承されてきた。アンドゥレアース聖人はキリスト十二使徒のひとり。ヨハネとともにイエスに帰依した、もっとも早い弟子。黒海の沿岸で布教にあたり、アカイア（ペロポネンソス半島）のコリント湾の南岸、パトラスで十字架にかけられた。その十字架が斜め交差十字架だったというのだが、それがウォラギネはそう書いてはいない。美術作品に、斜め交差十字をアトリビュートとする像が現れるのは13世紀以降のことだという。なにやら権兵衛の文章は、これがブルグーン家の徽章であったかのように読ませるが、まだまだそうはいえない。同家が「サンタンドゥル聖人」を守護聖者に祀るようになるのは、1430年初頭に「金羊毛騎士団」を設立してからのことで、騎士団の守護聖者もまた「サンタンドゥル」で、騎士団の第１回集会はその年の「サンタンドゥル」の祝日、11月30日にひらかれている。

それがそれではそれ以後、X字形の図案が、旗指物だの甲冑だのの装飾図案にバタバタ使われるようになったのかというと、どうもそういう気配はない。１年後、1432年の５月に完成したと年記が入っている「ヘント（ワロン語系でガン）の祭壇画」、フーベルトとヤンのアイク兄弟の仕事に、「ブルグーンの騎士たち」と呼ばれる１画面がある。どうぞ『画家たちの祝祭』をごらんいただきたいわけで、全画面、カラー口絵でごらんいただけます。閑話休題。その騎士たちの手にする槍旗、楯に大きく描かれている十字模様はラテン十字形である。「金羊毛騎士団」が「サンタンドゥル十字」を徽章の図案にしたということもない。このあたりの景色がなんともおもしろく、前後してイングランドのランカスター家が「セントジョージ」を、フランスのヴァレ家が「サンドゥニ」を守護聖者に祭り上げていく。そういう中世の秋の王侯権力のイコノグラフィックな表現の世界は、なんともおもしろい。

さてさて、そういう次第で、1411年のこの時期に権兵衛がこう書いていて、なにかサンタンドゥルはブルグーン家だといっているように読めるが、それがこの前後のブルグーン家と

サンタンドゥルとの関係ははっきりしない。ブルグーン家はやがて2年後、1413年に失権して、おそれしらずはパリを退去するが、そのまた5年後の1418年5月、パリを回復して軍政下においた。その直後の記事、テュテイ編で198項に、「サントゥスタス教区でアンドゥリ聖人信徒会を作ろうではないかという話が出て、6月の9日、木曜日に集まりがあった」。パリ市内でアルマナック党派の粛正騒ぎが起きたばかりというのに、なんとものんびりした話で、あまつさえ、権兵衛の証言によれば、出席者全員、生花の赤ばらを飾り付けた帽子をかぶってきたものだから、「教会堂は、まるでばら水で洗われたかのように、よい香りがあふれた」。

じつは、その4年前、1414年9月に、そのサントゥスタス教会で一騒ぎがあった。権兵衛にいわせると、ある若者が、ウスタス聖人の像から帯をはずし、それをくれたお歴々に対するあてつけに引き裂いてみせた。若者はその場で取り押さえられ、教会堂の前のアレ橋の上で拳を切り取られ、パリ追放の刑に処された。アレ橋というのは、サントゥスタス（サンテュスターシュ）はいまの教会堂よりも小型で、教会堂と「レアル」中央市場とのあいだに細流が流れていて、そこに架かっていた小橋のことです。

それが、サンドゥニ修道院の年代記によると、これは職人で、サントゥスタス教会堂内で、サンタンドレ聖人の御像を飾っていた飾り帯だか、白帯だかを引きはずして見せたのだという。どうも権兵衛情報とは食い違うようだが、この話を脚注で紹介してくれているテュテイは、それ以上、なにもいっていない。なんとねえ、サンタンドゥルが1414年にも出現した。

権兵衛は、1411年の記事に「サンタンドゥル十字の徽章」と書き、1418年の記事に「アンドゥリ聖人信徒会」の話題を披露する。1411年、ブルグーン家は隆盛の極にあり、1418年、ブルグーン家は、一旦失ったパリの覇権を回復する。なにか「サンタンドゥル」はブルグーン家の守護者のように見えるではないか。それが、権兵衛は、「ブルグーン家の徽章であるサンタンドゥル十字」とか、「ブルグーン家の守護聖者のサンタンドゥル」とか、なにしろサンタンドゥルはブルグーンなのだというわたしたちの思いこみを裏書きしてくれるような発言はまったくしていない。これはとても印象的なことです。

それに、サンタンドゥルはブルグーンなのだということならば、1414年の記事は、いったいどう読めばよいのか。権兵衛は、若者が「ウスタス聖人の御像」を冒瀆したのを咎められて刑罰を受けたと読めるふうに書いている。これはよくわかります。なにも拳を切り落とすところまでやることはないだろうと、それは強く抗議したくなりますけれど。それがテュテイが注記するように、どうやら教会堂内の「アンドゥル聖人の御像」の瀆聖が問われたということらしいという話になると、すぐさまそれに飛びついて、そうなんですよ、サンドニの修道士の証言の方がタダシイ。日記の筆者はわざとあいまいに書いていると、とんでもない論評を加える御仁が出てくる。ボーン女史がそれですが、女史は、なにしろ党派対立でぜんぶ説明しようとホゾをかためている。1414年には、ブルグーン家は失権し、パリを退去して

いたという事情も女史を困惑させない。サンタンドゥルの像にかけられた、なにやら飾り帯は、「レ・ザルマニャック」の側からする、「ブルゴーニュ家の」守護聖者である「サンタンドレの像」に対するからかいである。「飾り帯をかけることは、ブルゴーニュ党派に対する挑発を意味し、それを取り去ることは、他方の陣営に対する挑戦を意味した。」やれやれ、権兵衛は「サンタンドレの像」なんて書いていないのですよ。権兵衛のテキストでもないものを、したり顔をして解説してみせて、いったいこのボーン女史というお方は、注釈の仕事をどう考えているのだろう。

どうも「サンタンドゥル」はブルグーン家の守護聖者だと思いこんでしまっていて、そのあたり、なにかあいまいで不安な気分をもてあましている。権兵衛はそんなことはなにもいっていない。「サンタンドゥル十字の徽章」をいうのにも、「十字の真ん中にユリ花の楯型紋が入っていて」と重ねている。「ユリ花の楯型紋」はフランス王家のヴァレ家の紋章図案です。14世紀から三つユリ紋になっていて、「エク」楯型枠に上ひとつ、下ふたつの配置で描かれる。かりに、かりにですよ、「サンタンドゥル十字の徽章」が、この時点で、すでにブルグーン家のものだったとすると、ブルグーン家とヴァレ家は持ちつ持たれつだと徽章が語っていたことになる。そういうふうに読むと、「なにしろつけていなければ、パリから外に出られなかった」という奇妙な一文も、なにか分かったような気にさせられる。わたしがいうのは、これは王家の発行する関所手形みたようなものだった。「十字の真ん中にユリ花の楯型紋」が肝心要だったのですよ。

18（18）

10月の13日、レザルミナがサンクルー橋をとった。そこの守備隊長だったクーリン・ドゥピゼなる裏切り者がやつらに売り払ったのだ。町のまっとうな人たちの多くが殺された。財物はねこそぎとられた。まわりの村々から財物がもちこまれていて、町にはなにしろたくさんあったのだ。それが裏切り者のせいで、ねこそぎやられた。

［注釈］「レザルミナ」

ここでは les arminaz と書いている。armignac, armignazから -g- の一字が減っただけではないか、さわぐなといわれても、さわがずにはいられない。近代は -gn- は拗音をあらわすと、このケースだと「アルマニャック」「アルマニャ」と読みなさいと、一年生をおびやかす。ニャ、ニ、ニュ、ニェ、ニョと、一年生諸君、お題目を唱える。それが権兵衛は、マシオかな、平然と arminaz と書いてくださる。ナ、ニ、ヌ、ネ、ノでいいのです。

「サンクルー橋」

パリの西、セーン右岸の自動車専用道をいって、ポルト・ド・サンクルーで12番の「リュ・ド・ラ・レーン」王妃の道に入ると、まもなくセーンに架かるサンクルー橋だ。橋を越えて

すぐ道はトンネルに入り、トンネルを出ると道は西オートルート、ルーアンへ向かう自動車専用道になる。以上は1971年から翌年にかけての状況です。「12番」というのは、パリから外に出る道路の番号表示の数字です。恐れ入ります、わたしどもがはじめてパリに住んだころの話です。西オートルートはサンクルーが起点だった。いまは、どこからでもパリ周縁道に乗れば、ぐるぐるまわっているうちに、なんということもなく、西オートルートに入っている。

「クーリン・ドゥピゼなる裏切り者」

パルルマンの録事ニクラ・ドゥ・ベイが、11月14日の記事にこの男の話を書いている。サンクルーは11月に入って、「十字の真ん中にユリ花の楯型紋が入っているサンタンドゥル徽章」をつけた側が取り返し、裏切り者は捕まって処刑された。その件は権兵衛も後で書いているので、そこであらためて紹介するが、録事は colinet de puiseux と書いている。テュテイの紹介によると、パルルマンの「ジュジェ」（判断とか裁決とかをいう）にもそのオルトグラフで出るという。まあ、「ピズー」でしょうねえ。

19（19）

10月の14日、（かれらは）サンドゥニをとった。サンクルーのときと同様、内応するものが出て裏切ったからで、ブルグーン侯与力のシャールンの領主が裏切りに同意を与えたのだという説もある。

［注釈］「ブルグーン侯与力のシャルーンの領主」

テュテイは Jean de Châlon, sire d'Arlay, prince d'Orange と、chaalons の -aa- を気にしているようだが、Châlon だと Châlons-sur-Marne とまちがわれかねない。これは jean de chalon でかまわない。「シャルーン・スル・ソーン」、現在の Chalon-sur-Saône, ソーヌ河畔のシャロンです。「シャルーンの領主」といっているのはアルレの領主ジャン・ドゥ・シャルーンのことで、このブルグントの一族は「シャルーン - アルレの家系」と呼ばれる。14世紀の末に、婚姻関係からローン河畔のオランジュ領を領することになり、このオランジュ領が「プリンシポーテ」の位格をもっているということで、「シャルーン - アルレ家系」の当主は「プリンス・ドランジュ」オランジュのプリンスと呼ばれることになった。アルレはシャロンの真東、「飛ぶ鳥の距離にして」50キロ、もうほとんどジュラ山地にかかっている。ブルグーン家のブルグント家臣団の一員で、サンドゥニの守備隊長だったが、レザルミナの猛攻に耐えかねて、町を破壊させるよりはと、10月11日、降伏した。

20（20）

サンクルーとサンドゥニ、ふたつの町の支配者になると、バンドの連中は思い上がって、

パリの門の近くにまで押し出してくるようになった。かれらの首領たちはモンマートゥルに宿営して、パリの町の様子を遠くから見張る、だれが入っていったか出ていったかを調べる。パリの住人にとっては、なんとも気ぶっせいなことだった。このころパリにアンゲレン・ドゥ・ブーノンヴィルという名の楯持ちと、アメ・ドゥブレというのがいた。この両名はなにしろ夜となく昼となく、しきりに連中に襲撃をかけていて、レザルミナはサンポール伯とその手勢なんかよりも、もっとこのふたりの男の方をおそれていた。サンポール伯はパリの隊長で、旗幟はブラシュの花印だった。

［注釈］「かれらの首領たちはモンマートゥルに宿営して」

「ルー・シヌー」となんとも訳しにくい。「かれらの領主たち」でいいだろうか。なにか抵抗感がある。「モンマートゥル」、モンマルトルは小高い丘で、中腹に尼僧院がある。モンマートゥル門から２キロほどで、高みからパリを見下ろすのにちょうどいい。どうぞ、サクレクールの前の広場が南に向けて展望をひらくテラスになっている。そこにお立ちになってみてください。パリの街並みが眼下にひらけます。

「アンゲレン・ドゥ・ブーノンヴィルという名の楯持ちと、アメ・ドゥブレというの」

「アンゲレン」は angren と書いていて、-g- の字の上に省略記号をつけている。だから angueren なのだろうが、この書き方はあまり見たことない。ヴァチカン写本の余白に、後代の筆跡で書き込みがあって、クロード・フォーシェのものが一番まとまっているが、これはかれの筆跡ではなく、ただ angueran debournonvile と書いている。「アメ・ドゥブレ」の方にも Ame de Brey と、なぜかこちらの方は大文字を使って書いている。「楯持ち」だが、これは「エクェ」escuier の訳です。「エク」楯を持つ者の意味合いで、騎士の従者の最上位者です。もっとも王家役人にやたらこの肩書を使ったから、たとえば「エクェ・デクリ」というと「厩のエクェ」で、「厩番役」でしょうねえ。身分の呼称としては「従騎士」という訳語も使われる。

「サンポール伯とその手勢」

ここで名指しされている「サンポール伯」はヴァレラン・ドゥ・ルクセンブー、ルクセンブルク侯家の分家です。当時ドイツ - ボヘミア王家の一族ということになるが、ヴァレランはフランス王国に領地をもらっていて、アルテ（アルトワ）のサンポール領についてはブルグーン侯に臣従し、もうひとつ、バーのリニの伯としてはヴァレ家に臣従し、酒蔵奉行だの厩奉行だのをつとめている。ヴァレ家とブルグーン家がなかよくしているいまは、ヴァレランはのびのびと羽を伸ばしている。

「サンポール伯はパリの隊長で、旗幟はブラシュの花印だった」

「サンポール」はいまの「サンポール・シュール・テルノワーズ」、アラスの西30キロ、国道39号線をあと50キロいけば、ブーローニュの南で海に出る。どうぞわたしのエッセイ「軍

旗はブラシュの花印」をごらんください。タイトルを同じにとったエッセイ集におさめてあります。「ブラシュ」は英名「ボリッジ」といい、学名は「ボラーゴ・オフィキナリス」、日本では「ルリヂシャ」と呼ばれる。花が深い瑠璃色の、チシャのような茎や葉に毛が生えている。発汗利尿に効く。オシッコの出がよくなるハーブです。いいえ、ですからわがイマジネールに、初夏のテルネーズ（テルノワーズ）の川縁にブラシュの群落が映える。あるいは、もっと散文的に、サンポール家の館の裏庭に、ブラシュ畑があったか？　ヴァレランはブラシュにブグロッスをまぜた煎じ薬をいつも飲んでいたか？　ブグロッスはこれもボラーゴ科のハーブで、和名を「ウシノシタグサ」という。この処方は16世紀の農学者オーリヴェ・ドゥ・セルの指示である。閑話休題。「旗幟」と訳したのは「バネール」、一軍の将旗です。これにはその所有者の家の紋章が描かれる。「バネール」よりも下位の「エスタンダール」には紋章を描くことができない。だいたいが「エスタンダール」は横長の旗で、先端がすぼまっている。だから細長い三角旗にも見える。どうぞ、1429年の記事で、「ジャーン・ダール」（ジャンヌ・ダルク）の話題のところをごらんなさい。「エスタンダール」の解説をする予定です。　閑話休題。「バネール」は紋章旗である。すると、なんですか、サンポールとリニの伯ヴァレラン・ドゥ・ルクセンブーの紋章は「ブラシュの花印」だったのですか？　そう権兵衛が証言している。わたしは権兵衛を信用する。息を呑むほどに深い海の青のブラシュを大きく描いた隊長旗がパリの大通りをいく。

1(4)［folio 12r., l.1～5］

Dont il leur print mal car il en mourut laplus / de xxvj mil et fut lexxiiij (à l' épaule droite: e) jour deseptembre / xxxx et huit Et en tant que laguerre dura / par feu p fain par froit alespee plus de xiiij (à l'ép.dr.: m) / or sont bien quarante mil

2(5)［l.5～15］

Le xvj (à l'ép.dr.: e) jour de / novembre ens a ung sabmedi les davant diz / signeurs cestassavoir navarre loys etc emeneret / le roy atours dont lepeuple fut moult trouble et / disoient bien que ce leduc debourg euste icy / quilz ne leussent pas fait ainsi lefirent et / la fut que la q (que) acharts xvij sepm et par / plusieurs foys yfut leprevost des marchans / et des bourgois deparis qui yfurent mand / et si ny arresterent oncques preu pour eulx / ne pour lepeuple

3(6)［l.16～folio 12v., l.5］

Le neufviesme jour de / mars ens revint leduc debourg atout noble / gent et le xvij (à l'ép.dr.: e) jour dud moys de mars / aung dymenche amenerent leroy aparis qui / fut receu

letresplushonnorablement quon vit / passe a deux cens ans car tous les sgens / comme duguet ceulx delamarchandise / ceulx acheval ceulx averge ceulx de la / xij (à l'ép.dr.: e) avoient divses livrees toutes espalment / dechapperons et tous les bourg allerent / alencont delui devant lui avoit xij trompect / et grant foueson menestrees et ptout ou il / passoit on crioit tsjoieusement nouel et / gectoit on viollectes etfleurs sur lui et au / soir soupoient les gens en my lesrues par / tresioyeuse chere et firent feus tout p tout / paris et bassynoiet debassins tout pmy paris /
[folio 12v.,l. 1～5] Et le lendemain vint laroyne et ledaulphin si / refust la joie si tresgrande comme le jour de de devant / ou plus car laroyne vint leplushonorablement / quom lavoit oncques veue entrer apis depuis / quelle vint lapremiere foys

4(7) [folio 12v., l.5～12]

Le xxvj (à l'ép.dr.: e) jour / de juing ens fut fait le saint pere cestassav / pierre de candye Et le lundi viij (à l'ép.dr.: e) jour dejuill / ensuivant fut sceu aparis on en fist moult / noble feste comme quant le roy vint de tours / comme devant est dit Et par tous les moust / deparis on sonnoit moult fort et toute nuyt / aassi

5(15a) [l.13～]

N que lemardi darrain jour de juing iiij (à l'ép.dr.: c) / et xj jour de sainct paul enviro huit heures / apres disner gresla venta tonna esptit (espartit) le / plus fort que homme qui adonq fust eust oncques veu

6(1) [folio13r., l.1～14]

Et environ dix ou doze jours apres furent changees / les sreures (n'y a pas signe d'abrégé) et clefs des portes deparis et furent / faiz mons deberry et mons debourbon cappitaies(avec signe d'abrégé) / delaville deparis et vint si grant foueson degens / darmes aparis q aux villaiges dentour ne demeur / aussi come nulles gens toutesvoies les gens / dudessusd duc debourgongne ne prenoient / riens sans paier et comptoient tous les soirs ales(avec signe d'abrégé) / hostes et poiaient (poioient?) tout sec en laville deparis et / estoient ce temps durant les portes deparis fm(avec signe d'abr.) / ce non iiij cestassavoir laporte st denis st / anthoine st jacques saint honore et le x (à l'ép.dr.: e) jour / deseptembre ens furet (avec sig. d'abr.) murees deplastre laporte dutemple laporte saint martin et celle de momart (avec sig. d'abr. sur mo et sur l'ép.dr. du caractère fin.: e)

7(2) [l.15～]

Et le vendredi ens xij (à l'ép.dr.: e) jour dud moy aryva / aparis levesque duliege et lui fist faire smet(avec sig.dabr.) / leprevost deparis et auts alentree delaporte / sainct denis q il ne soit (avec sig.d'abr., seroit) cont le roy nencont / laville ne lui ne s (biffé) les siens mais leur soit (avec sig.dabr.) / garant de trestout son povair et ainsi lepmist / il parlafoy deson corps et par son signeur / Et apres entra aparis et fut loge en lostel de / latrimoullie Et icellui jour apres sa venue / fut crie ce que on mist des lantnes a bas les / rues et deleaue aux huis et aussi lefist on / Et le xix(à l'ép.dr.: e) jour dud moys deseptembre fut / crie et commande que on estoupast les ptuys / qui donnoient clarte dedens les celiers Et le / xxiiij (à l'ép.dr.: e) jour ens fut commande par ttous les / fevres et marechaux depa (ave sig.dabr.) et chauderonniers /
[folio 13v., l.1~7] que on feist des chaisnes come autresfoiz avoient / este et lesd ouvriers defer commancer le lendem / et ouvrerent festes et dimenches et p nuit et jour / Et le xxvj (à l'ép. dr.: e) jour dud moys desept fut ce(avec sig.d'abr.; crie) / pmy paris que qui aur puissance davoir / armeure si en achatast pour gard labonne / ville deparis

8(3) [folio 13v., l.7~16]

Et le x (à l'ép.dr.: e) jour doctobre ens / jour de sabmedi vint telle esmeute en laville deparis / come on pouroit gueres veoir sans savoir pour quoy / mais on dis que leduc dorleans estoit alaporte de sainct anthoine atoute sapuissance dont il nestoit / riens et les gens duduc debourgongne sarmerent / car les gens deparis furent si esmeuz come / ce tout lemonde feust cont eulx et les voulsist / destruire et sine sceut on oncques pour quoy / ce fust

9(8) [l.16~27]

Lan mil iiij (à l'ép.dr.: c) et ix le jour de lamyaoust / fist tel tonnoyre environ ent cinq ou six heur / au matin que une ymage denredame (avec sig.dabr. sur nre; de nostredame) qui est (avec sig.d'abr.; estoit) / sur lemoustier de sainct ladre deforte pierre et / toute neufve fut detonoyrre tempestee et rompue / par mi le mylieu et portee bien loing de la / Et alentree delavillecte sainct ladre aubout / de devers paris furent deux hommes tempest (avec sig.d'abr.) / dont lun fut tue tout mort et ses soulliers / et ses chausses son gippon furent touz dessirez / et si navoit point lecorps entame et lautre / homme fut tout afolle

10(9) [l 27~folio 14r., l.8]

Item lelundi vij (à l'ép.dr.: e) jo (avec sig.d'abr.; jour) / doct (avec sig.d'abr.; et ensuite quelques caractères biffés) ens cestassavoir iiij(à l'ép.dr.: c) et ix fut pns / ung nome jehan de mont agu grant maistre / dostel du roy defrance empres saint victor et fut / mis en petit chastellet dont il

advint telle / esmeute aparis aleure quon lepnt (avec sig.d'abr. sur p; le prinst) come se tout /[folio 14r] paris fust plain desarazins et si ne savoit nul / pour quoy ilz senfuioient et leprint ung nome / pierre des essars qui pour lors estoit prevost / deparis et furent les lantnes (avec sig.d'abr. sur t; lanternes) commandees a / alumer comme autsf (avec sig.d'abr.; autresfoys) et de leaue aluis et / toutes les nuys leplus bel guet a pie et achal / quon vit gueres oncques aparis et lefais (avec sig.d'abr.; faisoient) / les mestiers lun apres laut

[Tuetey] (cestassavoir)assavoir (come se tout) comme ce tout

11(10) [l.8~22]

Et le xvij (à l'ép.dr.: e) jour / dud moys doctobre jeudi fut fut (pas biffé) ledess / grant maist dostel mis en une charrecte / vestu desalivree dune houppelande de blanc / et de rouge et chapperon de mesmes une chauce / rouge et laut blanche ungs esperons dorez / Les mains liees devant une croix deboys / ent les mains hault assis en lacharrecte / deux trompettes devant lui en ce lestat / mene es halles la lui on coupa lateste Et / apres fut porte lecorps augibet deparis et / pendu auplushault en chemise atoutes ses / chausses et esperons dores dont la rume / dura aaucuns des signeurs defrance come / berry bourbon alencon etplusieurs aut (avec sig.d'abr.)

12(11) [l.22~]

dont / il advint lannee ens iiij (à l'ép.dr.: e) et x environ lafin / daoust q chun (avec sig.d'abr. sur un; chacun) en droit soy admena tant / de gens darmes autour deparis que a xx / lieus environ estoit tout degaste car leduc / debourgongne et ses freres admenerent leur / puissance de devers flandres et bourgongne / mais ilz ne prenoient que vivres ceulx / auduc de bourg (pas sig.d'abr.; bourgongne) ne ases aidans mais tp largemt (de ces deux mots avec sig.d'abr.; trop largement) / [folio 14v., l.1~8] en prenoient Et les gens deberry et deses aidans / pilloient roboient tuoient en eglise et dehors egle (avec sig. d'abr. audessus) / espalment (avec sig.d'abr. sur pa) ceulx auconte darmingnac et les bretos (avec sig.d'abr. audessus) / dont sigrant charte sensuivy depain que plus / dun moys lesextier de bonne farine vall (avec sig.d'abr sur. ll.; valloit) liiij sp / ou lx dont les pauvres gens de ville come / audesespoir fuoient et leur firent plusieurs / escarmouches et en tuerent moult

12(12) [l.8~]

et tout ce / nestoit q pour lenvie quilz avoient pour ce / que les gens depis (sig.d'abr. sous p; paris) amoient tant leduc de / bourg (sig.d'abr. sur rg) et leprevost depis nome pierre des / essars pour ce quil gardoit si bien laville / deparis car toute nuyt et toute jour il / alloit tout pmy

(sig.d'abr. sous p; parmy) laville deparis tout arme / lui et grant foison degens darmes Et fais (sig.d'abr.; faisoit) / faire aux gens deparis toutes les nuys le / plusbel guet quilz povoient et ceulx qui / ny povoient aller fais (sig.d'abr.; faisoit) veiller davant le (à l'ép.dr.: r; leur) / maison et faire grans feuz par toutes les / rues jusques aujour et y avoit quartenis (sig.d'abr. sur ni) / cinqteniers (sig.d'abr. sur q) diseniers qui ce ordonnoient dont / ceulx dedevers berry et tendrent sicourt ceulx / deparis par devers laporte sainct jacques / a bordelles sainct marceau sainct michel q / les vignes demourerent avendeng (sig.d'abr.; a vendengier) et les / semailles et plus aquat (sig.d'abr.; a quatre) lieues entour depis (sig.d'abr. sous p) / devers lesd portes jusques alasainct climent / encore vendengeoit on Et p (sig.d'abr.; par) lagrace de dieu / il y avoit tres pou depouris car il fist / tsbel (sig.d'abr.; tres bel) temps mais ilz ne sepovoient eschaufer / es cuves Et si ne venoit pain aparis qui ne / convenist aller qure (sig.d'abr.; querre) aforce degens darmes /

[folio 15r.,l.1~6] par eaue et par terre Et y avoit ung cheval (sig.d'abr.; chevalier) / loge alachappelle sainct denis nome messire / morelet de betencourt qui alloit querre lepain / asainct brice et ailleurs lui et ses gens tant / que ce contens dura qui dura jusques / alatoussains

13(13) [l.6~folio 15v., l.9]

et ung pou devant avoit psche (sig.d'abr. sur p; prescher) / devant le roy le ministre des mathurins ts (tres) / bonne psonne et monst (sig.d'abr.; monstra) lacrualite q ilz fais / par deffaulte debon conseil disans quil faill / quil y eust des traitres en ce royaulme dont / ung prelat nome lecardinal debar q (qui) estoit / audit smon ledesmenty et noma (sig.d'abr.; nomma) villain chien / dont il fut moult hais de luniversite et du / comun (sig.d'abr.; comun) mais apou lui en fu car il pticoit (sig.d'abr. sousp; particoit) / grandement avecques les auts qui portoient / chun (sig.d'abr.; chacun) une bande dont il estoit embassad (sig.d'abr.; embassadeur) / Car leduc deberry et portoit celle bande et / tous iceulx depluy (sig.d'abr. sous p; de par luy) et ce tindrent tellemt (sig.d'abr.; tellement) / en celle bande quil convint que led prevost / fust despose pour lenvie quilz avoient sur / le comun depis (deus mots avec sig.d'abr.; le commun de paris) quil gardoit sibien car / aucuns et leplus delabande qui cuidoient / dectain (sig.d'abr. sur ct; de certain) que on deust piller pis (sig.d'abr. sous p; paris) Et tout / lemal qui ce faisoit de dela chun(sig.d'abr.; chacun) dis que ce / faisoit le conte darmignac tant estoit de / mallevoulente plain Et pour certain on / avoit autant depitie detuer ces gens come (sig.d'abr.; comme) / dechiens et que quelconques estoit tue de dela / on disoit cest ung armignac car ledit conte / estoit tenu pour trescruel home et tirant et sans pitie /

[folio 15v., l.1~9] Et certain ceulx delad bende eussent fait du mal / plus largement (c et un caractère biffés) cenefust lefroit et lafamine / qui les fist traictier come (sig.d'abr.; comme) une

chose non achevee / come (sig.d'abr.; comme) pour en charg (sig.d'abr.; chargier) arbitres et fut fait envir (sig.d'abr.; environ) / le vj (à l'ép.dr.: e) jour denovembre iiij (à l'ép.dr.: c) et x et sen alla chun (sig.d'abr.; chacun) / asaterre jusques ace que on les mandast Et / qui a perdu si aperdu mais le royaulme de / france ne recouvra lapte (sig.dabr.; la perte) et ledommaige quilz / firent en vingt ans ens (ensuivant) tant viengne bien

14(14) [l.10~16]

Et en ce temps fut la riviere desaine si petite / car oncques on ne lavit alasainct jeh (sig.d'abr.; jehan) deste / plus petite quelle estoit alasainct thomas / devant nouel Et neantmoins par lagce (sig.d'abr.; la grace) / dedieu on avoit aparis en ce temps environ / cinq sepmaines apres lallee des gens darmes / tsbon ble pour xviij ou pour vingt solz p lesex (sig.d'abr.; par le sextier)

15(15b) [l.17~28]

Lan mil xxxx et xj ens recommancerent / ceulx delabende leur mauvaise vie car en/ aoust vers lafin vindrent devant paris du / coste de devers sainct denis et deffirerent leduc / debourgongne et fist chun son assblee (sig.d'abr.; assemblee) vs / modidyer (sig.d'abr. sur o; mondidyer) mais que les bandez sceurent / labelle compaignie que bourgongne avoit / ilz ne loserent oncques assaillir et se les / actend (sig.d'abr.; attendit) il par cinq sepmaines quant leduc / vit lachose il dist que ilz navoient guerre q / auroy et alabonne ville deparis les renvoia ses communes et les convoya grant pais

[Tuetey] (deparis les renvoia) de Paris, lors renvoya (les convoya grant pais) les convoya grant païs (double points sur i, cestassavoir Tuetey lit *pais* comme *pays*; et aussi Tuetey note qu'on voit dans le manus. de Rome, c'est-à-dire de Vatican *renvoia* à la place de *convoia*; mais, en vérité, on y écrit *convoia*)

16(16) [l.28~folio 16r., l.19]

Et / les faulx bendez armignaz commencerent afe (sig.d'abr.; a faire) / tout lepis que ilz povaient et vindrent au plus pres deparis en plaines vendenges cest / ass(sig.d'abr.; assavoir) envir mynuit ent sabmedi et dimenche / iij (à l'ép.dr.: e) jour doctobre iiij (à l'ép.dr.: c) et xj furent apantin a /

[folio 16r., l.1~19) sainct ouin alachappelle sainct denis amomt (sig.d'abr. et a l'ep.dr.: e; a montmartre) / aglinecourt (sig.d'abr.; a glinencourt) et atous les villaiges dentour pis (paris) / dudit coste et assegerent sainct denis et firent / tant demaulx come eussent fait sarrazins / car ilz pendoient les gens les uns p les / poulces auts par les piez les auts tuoient et /ranconoient et

efforcoient femmes et boutoient / feuz et quiconques ce feist on disoit ce font / les armignaz et ne demouroit psonne esd (sig.d'abr.; esdiz) / villaiges que eulx mesmes Cependent (cependent) vint / pierre des essars aparis et fut prevost come / devant et fist tant que on cria par my pys (parys)/ que on abandonnoit les armignaz et qui pour (pouroit) / les tuer si les tuast et prinst leurs biens Si y alla moult degens qui plusieurs foyx leur / firent dommaige Et par espal (sig.d'abr.; par especial) compaignos(sig.d'abr.; compaignons) / devillaige que on nomoit brigans qui sassembler / et firent du mal ass (assez) soubz lombre detuer les armignaz

17(17) [l.19~25]

en cetemps prind (prindrent) ceulx deparis / chapperons de drap pers et lacroix standrieu vin (biffé) ou millieu de lacroix ung escu alafle (à l'ép.dr., r; a la fleur) / delis Et en moint dequinze jours avoit / aparis cent millis (sig.d'abr.; milliers) que homes que enfens / signes devant et derriere deladicte croix / car nul nyssoit deparis qui ne lavoit

[Tuetey] (ou millieu de lacroix ung escu) ou millieu ung escu

18(18) [l.25~]

Item / le xiij (à l'ép.dr.: e) jour doctobre prindrent les arminaz / lepont de sainct cloud par ung faulx traist (à l'ép.dr.: e; traistre)/ qui en estoit cappitaine q (sig.d'abr.; que) on nomoit colinet / depisex qui leur vendy et livra et furent tuez / moult debonnes gens qui estoient dedens / et tous les biens pduz (sig.d'abr. sous p; perduz) dont il y avoit gnt (sig.d'abr.; grant) / foison car tous les villaig de nto (à l'ép.dr., r; entour) y avoient /

[folio 16v., l.1] leurs biens qui furent tous perduz par lefaulx traict (à l'ép.dr.: e)

19(19) [l.2~6]

Item le xiiij (à l'ép.dr.: e) jour doctobre prind (prindrent) sainct denis / come sainct cloud par traison daucuns qui est (sig.d'abr.; estoient) / dedens sicome on dis (sig.d'abr.; disoit) que le signeur dechaalos (sig.d'abr.; de chaalons) / en estoit consentent lequel estoit auduc de / bourgongne

20(20) [l.6~20]

Quant les bendez furent maists (sig.d'abr.; maistres) / des ij de sainct cloud et sainct denis ils sen / orgueillirent tellement quilz venoient jusqs (sig.d'abr.; jusques) / aux portes deparis car leurs signeurs est log (deux mots avec sig.d'abr.; estoient logez) amomart (à l'ép.dr.: e; a monmartre) et veoient jusques dedens / paris et qui y entroit et yssoit dont ceulx / deparis avoient grant doubte

En cetemps / avoit aparis ung esquier nome (sig.d'abr.; nomme) engren (sig.d'abr.; enguerren) de / bournonville et ung nome ame debrey / qui moult leur firent deescarmouches et dejo (à l'ép.dr.: r; de jour) / et denuit car les arminaz doubtoient ply (plus) / ces deux homes (sig.d'abr.; hommes) que le conte desaint paul / et toute sapuissance qui lors estoit come / cappitaine deparis et portoit en sa baniere fleur debourache

（ほりこし・こういち）

「パリの住人の日記」校注（1）

堀越孝一

「パリの住人の日記」は15世紀前半、パリで暮らした人が書き残した日記である。名も素性も知られていない。日記とは呼ぶが、その実、出来事の回想、一年を振り返っての感想文など、覚え書きふうの記述も目立つ。唯一たしかな15世紀後半の書体の写本がヴァチカン図書館に保存されている。フォリオ版の紙187枚を綴じた冊子であって、最終ページが９行で終わっている下の余白に筆生マシオの署名が見える。ほぼ同時期にやはりパリで暮らし、「ヴィョン遺言詩」と総称される詩集を残した文人がいたが、その詩集が収められている詞華集のひとつで、パリの国立図書館の分館であるアルスナール図書館が保存する詞華集の最終ページにジルベー・クークィ、ジャン・マシオ、クロード・マシオの三つの人名が見える。ヴァチカン写本の「マシオ」は、このジャンかクロードかが同一人と思われる。日記の一番古い日付の記事は1405年９月のもので、一番新しいのは1449年10月の記事である。ブルグーン家とオルレアン家の張り合いが、オルレアン侯ルイの闇討ち事件（1407）を切っ掛けに党派の争いに展開し、そこにイングランドのランカスター王家が、またぞろノルマンディーに兵を入れる（1415）。日記はそのあたりからパリの暮らしの日常と非日常を記録し始める。かれは二十歳代の若者だったろうか。四十年後、老人のかれは、サンマーティン大通りのモーブエの水場のあたりに、仮舞台が組まれていて、「平和と戦争の物語」が演じられていたと実見報告する。これが残された一番最後の記事であって、なにかかれはかれの日記は「平和と戦争の物語」だといいたげではないか。

キーワード【ヴァチカン写本　ブルグーン侯　ベリー侯　レザルミヤ　パリ代官】

Pari no jūnin no nikki : collation and annotation (1)

Koichi HORIKOSHI

Key words; manuscript de Vaticane, bourgogne, berry, lesarminaz, prevost de paris

"Pari no jūnin no hikki" (in French, it is called customarry "Journal d'un bourgeois de Paris") is the journal of a person who lived in Paris in the first half of the fifteenth century. Neither its writer's name nor his social status is known to us. Only one verified manuscript is preserved in the Vatican Library. Its calligraphy points to the second half of the fifteenth century. The book contains 187 folios and on the last page one can see the signature "maciot", most probably the name of its scribe. About one generation earier, there also lived in Paris a poet who left a series of poems called collectively "Testament Villon". On the last page of the anthology of poems which contains "Testament Villon", preserved in the Arsenal Library of Paris, one can see three names, Gilbert Coquille, Jean Maciot and Claude Maciot. The Vatican "Maciot" is most probably one of these two "Maciots". The earliest dated item in the journal has the date of November 1405, the newest one October 1449. The feud between the house of Bourgogne and that of Orléans escalated into a partisan struggle on the murder of Louis, the duke of Orléans (1407). The royal

house of Lancaster of England re-opened the French War and occupied Normandy (1415). The writer of the journal began his business. Conceivably he was in his twenties at that time. Passé quarant ans (after forty years), the now oldman reports that, on the temporary stage by the "fontaine de maubue" (outlet of city water nicknamed maubue), "on fist une tsbelle histoire depaix et deguerre" (one presented a very beautiful history of peace and war). One reads it in the last item in the journal. As if he wanted to say that his joumel itself is a history of peace and war.